

新出の明星大学本『平家物語』絵本巻一について

柴田雅生（人文学部日本文化学科 教授）
山本陽子（人文学部全学共通教育 教授）

はじめに

本稿は、平成十九・二十年度科学研究費補助金研究成果報告書『物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化』（課題番号19520114、平成二十一年三月）の追加報告である。これは、この研究で対象とした明星大学所蔵の奈良絵本『平家物語』に新たに巻一が出現したためである（明星大学本『平家物語』絵本巻一の出現と本学所蔵までのあらましは、明星大学ウェブサイト「絵本・絵巻の世界」[URL <http://ehon-emakimeisei-u.ac.jp/>]の「平家物語絵本」コラムを参照されたい）。

本稿は、「第一部 明星大学本『平家物語』絵本巻一の書誌と言語的特徴について」と「第二部 明星大学本『平家物語』絵本巻一の絵画部分について」によって構成されている。前者を柴田が、後者を山本が執筆した。

第一部 明星大学本『平家物語』絵本巻一の書誌と言語的特徴について

柴田雅生

一 書誌

基本的な書誌事項は、言うまでもなく巻二以降と同じである。以下、
科研報告と重複するが、巻二以降と合わせたかたちで再掲する。

紙本著色 十一帖（全十二帖のうち巻一から巻十一の計十帖、巻十二
のみ欠く）

大きさ 縦二四・四糎 横一八・五糎

外題 「平家物語 第一」（以下、巻十一まで同様）

各帖の目録には「平家物語巻第一目録」などと「第」字を入れ
て記す。

奥書 なし

表紙 濃緑地金欄緞子装

料紙 金泥下絵入鳥の子紙

装丁 列帖装

挿絵 十一帖の合計二百四十面（すべて見開きの大きさ）

時代 江戸時代前期

黒塗箱入

巻	丁数(挿絵分を含む)	挿絵数
巻第一	103	17
巻第二	119	21
巻第三	108	21
巻第四	105	21
巻第五	95	18
巻第六	81	15
巻第七	101	21
巻第八	91	24
巻第九	145	39
巻第十	111	22
巻第十一	113	21
合 計	1172	240

新出の巻一は、その大きさ（外寸）、表装や装丁、金泥による下絵入
りの料紙、本文字体、すべてが見開きの挿絵など、巻二以降と僚巻（ツ
レ）であることは疑いを容れない。以下、原則として先の報告にならう
かたちで記述してゆく。

本文は、江戸時代に古活字本や絵入り版本として流布した本文（流布
本）の系統のもので、十二巻から構成される。巻第十二を欠くのが残念

であるが、巻第一の目次と本文中の章段名は以下の通り。「付」などを付して章段名を続ける場合は次行に字下げして示す。

目録

本文中の章段名

祇園しやうしやの事	祇園しやうしやの事
殿上のやみうちの事	殿上のやみうちの事
すゝきの事	すゝきの事
付かふろ	かふろ事
我身の栄花の事	我身のゑい花の事
妓王事	きわう事
二代のきさきの事	二代のきさきの事
かくうち論の事	かくうちろんの事
きよ水ゑんしやうの事	きよ水ゑんしやうの事
てんかのり合の事	てんかのりあひ
しゝの谷の事	しゝのたにの事
う川かつせんの事	宇川かつせんの事
くはんたての事	くはんたての事
みこしふりの事	御こしふりの事
たいりゑんしやうの事	たいり炎上の事

表記に違いはあるものの章段名は巻一を通して同一と言ってよい。明暦二年版本等の流布本系統とはほぼ同じと見なせる本文も、巻一においては明暦二年版本との間に大きな異同は見られず、巻二以降に一行を超える脱落箇所（巻五に二例、巻三・七・八に各一例あり）が見られることと好対照をなしている。本絵本製作の順序は不明としか言いようがないが、

あるいは巻数順に書写したのであれば、書写を始めたばかりであるために集中力が持続した状態であったかとも考えられるかもしれない。とはいえ、次節に示すように、転写時の不注意によると見られる誤脱箇所は一定数存在する。

二 本文についての考察と言語的特徴

巻一本文の誤脱箇所については、細字による傍書補入が三箇所見られるものの、大半の脱字・衍字・誤字は補訂されず、そのままとなっている。

まず、傍書記載箇所は、以下の通り。傍書部分は「へ」に入れて、該当箇所以外は適宜漢字を当て、濁点等を施して示す「／」は改行を示し、傍書部分に関わる注記は《》内に記載した。

御さい・〈きよ〉《裁許》／なくして（巻一・八十五オ）
神人／宮司しばらくゆらへたり・〈わか〉《若》大衆悪僧共は（巻一・九十一オ）
天までも聞こえけん・〈らう〉《堅牢》地神もおどろ／き給ふらんとぞ（巻一・九十三ウ）

いずれも補入を示す小さな丸印（右の例では「・」にて示している）を本文の間に書き入れ、その右傍に記している。巻二以降には単に右傍に小字を添えるだけのものも見られる。ただ傍書補入箇所が少ないため、巻一末尾の帖に偏る傾向とともに、明確な理由があるとは断じにくい。脱字・衍字・誤字と判断される箇所は以下の通りである。

- (1) おごれる者久し／からず。
(巻一・二オ、「者」の下「も」脱か)
- (2) つか袋つけたる太刀わき／はさみて(巻一・四ウ、「る」の誤)
- (3) 諸卿／一同に祈申されければ(巻一・九オ、「訴」字の誤)
- (4) 平家の御事あしざま申者あれ／ば
(巻一・一七オ、「ま」の下「に」脱)
- (5) 文徳天皇／の御時は左ふさ右大臣の左大將
(巻一・一八ウ、「左」の下「によし」脱)
- (6) 九条殿／貞仁公の御子也。(巻一・一八ウ、「信」字の誤)
- (7) 又けんくん《教訓》し／けるは(巻一・三〇オ、「う」の誤か)
- (8) 仏御前ぞ出きる。(巻一・三十七ウ、「き」の下「た」脱)
- (9) 今にはづ／はつかしうかたはらいたくこそ候へ。
(巻一・三八オ、「はつ」衍)
- (10) かくり《用里》先生(巻一・四十六ウ、「ろ」の誤)
- (11) 西へ／入御なるに(巻一・五十九ウ、「御出」の誤)
- (12) 御こしの鞅／きりはなち(巻一・六十二ウ、「う」の誤か)
- (13) 還御のぎしき《儀式》あさましき
(巻一・六十三オ、「き」の下「に」の誤)
- (14) さま／＼いのりを始めらる。
(巻一・六十六オ、「く」の下「に」脱)
- (15) 鹿の谷と云所はうしろ三井寺についで
(巻一・七十一オ、「ろ」の下「は」脱)
- (16) かへす／＼／おそろしかりし事共なり。
(巻一・七十二オ、「く」の下「も」脱か)
- (17) 坊舎一字も残さずやきはらふ。
(巻一・七十七ウ、「ず」の下「みな」脱か)
- (18) 御さいきもなかりければ
(巻一・七十九オ、「き」の下「よ」脱、《裁許》)
- (19) 江帥匡房の卿の申されし山門の大衆
(巻一・八十一オ、「し」の下「やうに」脱)
- (20) 人奇特の思ひをなして(巻一・八十四オ、「る」衍)
- (21) おぢ《伯父》のり盛《教盛》・経盛などは
(巻一・八十九ウ、「おぢ」の下「頼盛」脱)
- (22) 三塔一のせんさしや《僉議者》と聞えし
(巻一・九十一オ、「ぎ」の誤)
- (23) 先陣より後陣までもつと／＼とぞ同じける。
(巻一・九十二オ、「で」の下「みな」脱か)
- (24) なをし矢おふて供奉せらる。
(巻一・九十六ウ、「し」の下「に」脱)
- (25) 一筆書ひて大衆の中へをくらるゝ。
(巻一・九十七ウ、「ゝ」衍か)
- (26) 尾張の井戸田へ流さるゝ。(巻一・九十八ウ、「ゝ」衍か)
- (5) や(21)のように内容に関する脱落箇所がある一方、(2)(仮名「る」と「か」)や(3)「訴」と「祈」のように字形が類似したものも見える。(10)は「用」字を「角」と見誤ったためか。(6)も、「信」字の傍の部分の草体を見誤ったとすれば、同類と見なすことができよう。(12)は「う」の単純な誤写である可能性が高いが、「こし(興)」と解することもできるかもしれない。

その中でやや目立つのが、連体形終止とも捉えられる二例の(25)(26)である。流布本系の本文では「送らる」「流さる」とある部分が、文末であるにもかかわらず連体形のかたちをとっている。衍字の可能性は否定しがたいが、新たな終止形に相当するものとして、旧来の連体形が用いられたと想定することもあながち無理な話ではないと考える。

明暦版本とは異なるものの、独自本文とまでは言えないと考えられる箇所には次のものがある。

(27) 恩賞是をもかるべしとぞ。

(巻一・一十三オ、流布本諸本「とて」)

(28) 始は水干に立烏帽子白鞘巻を指いて

(巻一・一二十三オ、流布本諸本「昔」字)

(29) 又出立ける心の中こそ (巻一・一三十一オ、流布本諸本「立出」)

(30) 入道相国のちやう／なん 《長男》小松殿

(巻一・一六十八オ、流布本諸本「嫡男」)

(31) 関白殿の御格子をあけゝるに (巻一・一八十二ウ、「け」の下「ら」脱か、明暦版本以外の流布本に「あけける」とするものあり)

(32) ただ今山より取りてきたりたるやうに

(巻一・一八十二ウ、「りた」衍か)

(33) 泣くく／＼本山へぞかへりける。

(巻一・一九十四オ、明暦版本「かへりのぼり」)

(28)と(30)は語義が異なるが、文脈上はさほど変わりないと判断できる。他にも文意を大きく変えるほどのものではない。

このほか、流布本系統に見られる言語的特徴として、岩井良雄氏は音

転語・略音語・約音語・音便形の四種を挙げられている(『流布本平家物語語法考』(昭和五十三年一月、笠間書院)の「第六編 俗語」の項)が、それらはそのまま明星大学本の巻一にも見られる。

一条の大路より南へおつこしてけり。(巻一・一六十八オ)

はる／＼とのぼつたりける童御子(巻一・一八十三ウ)

上卿を取てひつぱり、しやかぶり 《しゃ冠》打おとし

(巻一・一九十七ウ)

右のほかに音便形(とりわけ促音便形)は多数見え、第三例の「しゃ」をはじめとする俗語的要素が散見することも言うまでもない。

第二部 明星大学本『平家物語』絵本巻一の絵画部分について

山本陽子

一 明星大学所蔵本（巻二・巻十一）との比較

新出の『平家物語』絵本巻一には挿絵が十七面、貼り込まれている。いずれも明星大学所蔵本（巻二・巻十一）と同じく見開きの二頁を一図に用い、手描きの大和絵で金や上等な絵具により丁寧に彩色されている。人物は四頭身ほどと頭が大きく丸顔である。貴族や女房たちは繊細な筆でやや細めの上品な引目鉤鼻に表されるが、目には下瞼の線と瞳が入れられ、目と眉の間には時に眼窩の線が薄く入り、頬などには淡橙色の隈がうっすらと刷かれる（図1）。庶民や鎧武者や僧兵ではやや鼻を大きく、口回りを薄墨でぼかして髭面にと描き分けをしているものの、「額打論」の場面の荒ぶる僧兵でも赤い小さな点のおちよぼ口に表され、忿怒は感じられない。このような顔立ちや、武者までも控え目に上品に描いてしまうことは、明星大学所蔵本の挿絵の人物表現とも一致する（2）。それぞれの衣服の文様も時には金泥も交えて細かく書き込まれ、特に黒の束帯の上には膠の強い艶墨で地紋が重ね描かれている。鎧兜も丁寧に描かれているものの、公家装束の方に手慣れている感が強い。

背後の地の部分にはうっすらと金泥を刷き、土坡に緑青を施し、海は細い墨線をゆるく不規則に波打たせて重ね、上から群青の絵具を控えめに刷く。建物部分は定規を用いて界線をきっかりと描き、障子にはわずかに山水や草花を水墨や淡彩で描く。絵の上下に霞を柵引かせ、霞の輪

郭は細い墨線で描き、その内側には淡く青灰色を刷き、中心部には金砂子を密に蒔く。内裏等の描写は有職故実に照らし合わせた正確なものではなく、床全体に畳を敷き詰めた表現は、住吉派など近世初期の大和絵の「同時代の要素と復古的な要素が複合的に選択された」もの（3）となっている。彩色には緑青や群青のような高価な絵具が使われているが、べた塗りではなくあっさりとは刷かれ、鮮やかな朱色の他に、桃色やくすんだ水色も使用されているのが目につく。これらの特徴も明星大学所蔵本と共通し、本来は一具のものであるとする根拠の一つとなった。

挿絵本には最初の巻にのみ多く挿絵が入られる場合があるが、明星本の他の巻と比較すると、巻一の挿絵の一七図はむしろ少ない方で、巻二・三・四・七・十一は二一図、巻九に至っては三九図あり、巻一より少ないのは巻六の一五図のみであった。また巻一の「我身栄華」は華やかな見所として、例えば林原美術館蔵の『平家物語絵巻』（註4参照）などでは長大な画面に、他よりも細やかな彩色で平家一門と女性達が描かれているが、明星本巻一では他と同じく見開きの二頁で、男性の束帯も女房装束も詳細に文様は描かれるものの、他の場面と手の掛け方に差異は見出されない。明星本が十分な時間と金銭的余裕の下に注文を受けた作品で、全二百数十面の挿絵が、計画的に淡々と描かれたであろうことをうかがわせる。

ちなみに明星本本文の下絵は、淡い鳥の子色の紙に金泥のぼかしで幾筋も霞を柵引かせ、冒頭の頁には金泥で大降りの梅樹と松樹をからめ足



図1 明星本『平家物語』絵本「鱸」清盛部分

元に笹をあしらった図様を描き、次頁では遠山に藤と若松の景色を、次いで目録の一頁目に大振りの柳樹に椿樹を、次頁には一面に鉄線花の棚を表して物語の始まりを印象づけるが、以後の頁では霞の間にやや小さめの遠山や草花などを金泥で配している。このような冒頭部分の描き分けと下絵の表現も、明星大学所蔵本巻二（巻十一）と共通する。

二 各場面の検討及び『平家物語』諸挿絵本との比較

新出の明星本巻一（以下、明星本と略称）の挿絵の主題は、「鱸」^{すずき}「我身栄華」⁴「二代后」⁵「額打論」⁶「清水炎上」⁷「殿下乗合」⁸「鵜川合戦」⁹「願立」¹⁰「内裏炎上」¹¹が各一面、「殿上闇討」¹²「祇王」¹³「鹿谷」¹⁴「御輿振」¹⁵に二場面が充てられている（章末の明暦版本・明星本挿絵比較一覧図版参照）。物語からどのような場面が選択されたかを、江戸時代前期とされる挿絵入り『平家物語』である林原美術館蔵の絵巻⁴（林原本）・明暦二年の版本⁵（明暦版本）・真田宝物館蔵の絵本⁶（真田本）、および新たに根津美術館蔵の扇面貼込の画帖⁷（根津本）を加えて比較したものが、文末に付し

た【『平家物語』絵本・絵巻の場面対照表】である。

この巻一部分において、明星本のみに取り上げられた箇所はなく、絵画化しやすい場面が順当に選ばれた印象を受ける。また明星本巻一の場面選択が特定の挿絵本と一致することはなく、選択に相互の直接的な影響がうかがわれないことも、二巻以下と同様である。

次いで各主題の構図と、どのような瞬間が絵画化されたかを、他本と共通して取り上げられた「殿上闇討」¹²「鱸」⁴「我身栄華」⁴「祇王」¹³「二代后」⁵「額打論」⁶「殿下乗合」⁸「御輿振」¹⁵で、比較したい。

明星本「殿上闇討」の一場面目（図A）以下、章末の明暦版本・明星本挿絵比較一覧図版参照）は、抜身の刀を持って縁先に立つ平忠盛と、庭先に控えて誰何される忠盛の郎党を一図に描く。明暦版本（図a）と真田本は庭先の郎党のみで、抜身の刀を持つ忠盛と庭先に控える郎党を同時に描くが、屋内に坐したままで、明星本とは異なる。明星本二場面目（図B）の忠盛が預けた竹の刀を前に鳥羽上皇に釈明する箇所は、林原本・真田本・根津本にあるが、御簾の奥の天皇を正面とする構図が共通するのは林原本のみで、その林原本では他者が刀を手にとって検める場面、明星本と図様は一致しない。ちなみに林原本では忠盛のみ武者や郎党のような肌色に描かれるが、明星本では他の貴族と同じく忠盛の顔も白塗りに表されている。

「鱸」は熊野詣の清盛一行が船に飛び込んだ鱸を吉兆として料理する場面、明星本（図C）は左上に緑青で山並が表され、左向きに一隻の屋形船の三分の二程が描かれ、清盛と俎上の鱸は向かい合うように配置される。真田本の一行は三隻の船、それ以外は一隻であるが根津本の船は右向き、林原本では清盛と俎^{まなこ}の位置が左右逆である。明暦版本（図

c)の山並と船の向きや清盛と俎の位置関係は明星本の構図と近いが、一行の人数や船尾まで描くか否かなどの細部は異なる。

「我身栄華」の明星本(図D)は、一段高い場所に僧形の清盛、その前に一門の男達が酒を酌み交し、壁を隔てた左に女達を描く。この場面はどの挿絵でも見せ場となっているが同一構図のものはなく、明暦版本(図d)では僧形の清盛の姿がなく、根津本では女達が一切描かれない。

「祇王」の明星本一場面目(図E)は、清盛と女が並ぶ前で舞う烏帽子姿の女で、祇王に取りなされて清盛の前で舞う仏御前の場面か、清盛の寵を受けた仏御前の前に呼び出された祇王の場面かの判断が難しい。

四場面に互って描く真田本で、舞う仏御前のみが烏帽子姿で描かれていることと、本文中で仏御前は「(鼓)打たせて一番舞たりけり」と書かれ、鼓を持つ男達が描かれることに対応する一方、祇王は泣く泣く「今様一つぞ歌うたる」とあるのみで舞う場面はないので、明星本の挿絵挿入場面は祇王の歌の後ではあるが、仏御前が舞う場面で清盛の隣が祇王と解すべきであろう。明星本の右の上座に清盛と祇王、中央に舞う仏御前、左に鼓の男達が描かれる構図は、林原本・明暦版本(図e)と近いが、林原本の仏御前は烏帽子を着けぬ後姿、明暦版本は仏御前の姿が明星本と近いものの舞う場所は座敷でなく屋外の板敷で、いずれも一致はしない。真田本は清盛達と仏御前の位置が違い、根津本の選択箇所は祇王が歌を書き残して清盛邸を出るところである。

明星本「祇王」の二場面目(図F)は、妓王親子の庵を仏御前が訪れる場面である。左の庵に仏を拝す尼姿の三人のうち右端の一人が振り返り、視線の先の門外に立つ仏御前を描く。この構図は明暦版本(図f)・真田本と共通する。ただし左端の尼が手に持つ仏具、門の屋根の有無、仏御前が笠を被るかや振り返る姿かなど、細部に相違が見られる。

根津本にこの場面はなく、林原本では三人が門で尼姿の仏御前を出迎える場面である。

「二代后」における挿絵の選択箇所は少しずつ異なり、明星本(図G)は二条天皇の迎えの牛車を左下に、故近衛天皇の后を父の右大臣が説得する箇所を描く。真田本もほぼ同様だが右大臣は立姿に表され、明暦版本(図g)は后が牛車へと立ち上がった時点、根津本は二条天皇と后が酒を前にした場面を描く。林原本では五場面に及び、后が艶書を受け取る場面、天皇の宣旨、大臣の説得、歌を書く后、車に乗り込む后、天皇との対面を描くが、いずれの図様も他本とは一致しない。

「額打論」で、二人の荒法師が延暦寺の額を壊す姿はどれも一致しないが、いずれも歌舞伎の見得のように定型化している。差異は群衆の数と配置とその反応にあり、真田本は上下に三十余名の僧侶の驚く姿を、林原本は四方に百五十人程の驚く僧侶達と、様々な姿勢の警護の武士二十四名を描き、根津本では右下に僧兵の一団のみを表す。明暦版本(図h)では四方の僧侶は十六人で、警護の四名の武士と左方の僧侶は逃げ腰であり、明星本(図H)は左右に九名の僧侶と三名の武士を描き、武士と左方の僧侶達は逃げ、右方の僧侶達は見守っている。

「殿下乗合」はいずれも資盛が関白の部下に引き落とされる寸前の場面で、明星本(図J)は立ち並ぶ町屋の前で関白の牛車を右に、馬上の資盛を左に描く。明暦版本(図j)の構図も同様だが、背後は山と木立である。真田本は川と木立の前に擦れ違った関白の牛車を左に、馬上の資盛を右にする。林原本と根津本は右の資盛を駕籠の中に描き、左に関白の牛車、林原本の背景は土堀、根津本の背景はない。

明星本「御輿振」の二図目(図P)は、右に一基の神輿を捨てて逃げる九人の僧兵を、左に待賢門を背に矢をつがえる鎧姿の重盛勢を十人程

描く。明暦版本(図P)も構図はほぼ同じだが僧兵の数は多く、放たれた矢や矢に当たって倒れる僧兵も描く。真田本の構図は右手前に神輿と僧兵、左上に重盛軍を対峙させる。林原本と根津本は三基の神輿が描かれ、林原本は待賢門を右にして、未だ攻め寄せる神輿と捨て去られる神輿とを描き分ける。根津本では僧兵と神輿を中央に、右に明星本一図目にあたる頼政軍との応対、左に待賢門内で待構える重盛軍を表す。各主題において、構図も絵画化された瞬間とも一致する作例はなく、相互の挿絵が直接的な模写関係にあると言い切れるものはない。

三 明星本と明暦版本に見られる近似する構図の作例について

ただし以上の図様の比較では、明星本と明暦版本において幾つかの構図が、同一ではないものの近似していることが注目される(明暦版本・明星本挿絵比較一覧図版参照)。該当するのはすでに挙げた「^{すずき}鯉」「^{すずき}王」二場面、「殿下乗合」「御輿振」の他、「鶴川合戦」「清水炎上」である。左右上下のような大まかな構図とどの瞬間を選ぶかの場面選択は共通するが、人数はいずれも明星本の方が少なく、個々の人物や背景などの細部は相違している。このことをどのように考えるべきであろうか。

例えば明星本の「祇王」二場面目で、門前の仏御前(図2)に対して庵内の三人の尼の一人が振り返る(図3)構図は明暦版本(図4)(図5)に近似しているが、この明暦版本の図様は真田本や、それ以外にもチェスタービーティーライブラリ本(CBL本)やプリンストン大学ゲスト東洋図書館本(ゲスト本)等の『平家物語』挿絵と共通していることが、出口久徳によって指摘されている。⁽¹⁰⁾出口はこれらの中で最も年代の古い明暦版本が他本の典拠とされたものと見て、それが「絵手本の

ような存在として流布していた可能性」を想定する。

ならば「祇王」ほか七件の近似した構図を持つ明星本も、明暦版本を典拠としたものであろうか。明らかに版本を典拠として作成された絵入り本の例としては、明星大学所蔵の絵本『徒然草』がある。⁽¹¹⁾この挿絵は一図を除いた全てが、『徒然草』の注釈書である版本『なぐさみ草』の挿絵から選ばれ、その構図に基づいて、登場人物を減らして白描に金泥で仕上げたものである。⁽¹²⁾しかし『徒然草』挿絵の版本挿絵への親近性と比較すると、明星本『平家物語』挿絵と明暦版本では、この場面に限っても、仏御前の笠の有無や振り返るか否か、三人の尼の位置や姿勢、手にする仏具など個々の細部には相違が見られ、親近性は薄い。

また滝澤貞夫は真田本において「祇王」など複数の構図が明暦版本と近似する現象について、挿絵への選択箇所が必ずしも同一でないこと、たとえ同じ箇所を選択した場合でも明暦版本と共通性のある構図は半分程度に過ぎないことを挙げて、真田本の絵と明暦版本との影響関係はないと見る。⁽¹³⁾同様のことは、明星本と明暦版本についてもあてはまる。場面の選択箇所が一致しないこと、両者で同じ箇所が選ばれている場合も「殿上闊討」「我身栄華」「二代后」「額打論」「鹿合」「内裏炎上」では違う場面や構図が選択されていることからすれば、明暦版本が明星本の直接の典拠であったと見ることは難しい。

それでは明暦版本と明星本の一部の構図が近似することは、どのように解釈すればよいのか。滝澤は明暦版本と真田本との近似について、『平家物語』の「同じ場面を描いている」ゆえと、「幾つかの『平家物語絵巻』にも描かれ、構図がある程度定まっている場合が有った」⁽¹⁴⁾ためと考える。そこで先行作品としてまず候補に挙げたいのが、宮廷絵師の土佐派による室町時代の白描「平家物語絵巻」の断簡である。静嘉堂美術



図3 明星本『平家物語』絵本「祇王」二場面目
三人の尼部分



図2 明星本『平家物語』絵本「祇王」二場面目
仏御前部分



図5 明暦版本『平家物語』巻一「祇王」二場面目
三人の尼部分 (国立国会図書館蔵)



図4 明暦版本『平家物語』巻一「祇王」二場面目
仏御前部分 (国立国会図書館蔵)

出口が別論文で挙げているように、合戦図の屏風や絵馬、清水寺のような名所であれば名所絵の影響も視野に入れられよう。ことに「祇王」は独立した物語とされて、奈良絵本や謡曲にも取り上げられている。明暦版本と明星本の構図の近似を、共通する先行図様に求めるのであれば、絵巻や絵本以外にも、これらの多様な媒体による『平家物語』の作品群を対象としてゆかなければならない。明星本の挿絵の典拠は、そのように広大で多様な平家物語絵の分野において、あらためて検討すべきものであろう。

館に所蔵される巻一の五場面⁽¹⁴⁾の挿絵には、明星本や明暦版本と共通する「鱸」の場面があるが、鱸が船に飛び込んだ瞬間を描き、船も二隻で構図は全く違う。また「二代の後」も、静嘉堂本は迎えの車に乗る場面の后を後ろ姿で表すもので、残念ながらいずれの挿絵とも一致しない。

しかしこの時代までに『平家物語』は、絵巻や絵本以外の分野においても多く素材として取り上げられている。

註
(1) 詳細な原色図版写真は、WEBサイト「絵本・絵巻の

- 世界」『平家物語』http://ehon-emaki.meisei-u.ac.jp/heike_top.htmlを参照された。
- (2) 山本陽子『『平家物語』絵本・絵巻の挿絵について―明星大学図書館所蔵本を中心に―附 林原本・明暦版本・真田本・明星本場面対照表』『明星大学研究紀要』〔日本文化学部・言語文化学科紀要〕第一七号 二一〜三九頁 二〇〇九年、参照。
 - (3) 赤坂真理「江戸前期における寝殿造りへの憧憬と理解―住吉派物語絵にみる住宅観―」『講座源氏物語研究第十巻 源氏物語と美術の世界』二三四〜二六五頁 おうふう 二〇〇八年、参照。
 - (4) 小松茂美編『平家物語絵巻』巻第一 中央公論社 一九九〇年、参照。
 - (5) 国立国会図書館所蔵本（国立国会図書館デジタルコレクション）<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2367331> 参照。参考図版も同サイトより。図は中央で山折りにせられ表裏として綴じられているが、本来は一図のものとして拵げた形に再現して扱う。
 - (6) カラー図版は小林一郎・小林玲子「絵で読む平家物語」第一回・第二回『長野』一九三・一九四号 参照。
 - (7) 根津美術館学芸部編『平家物語画帖』根津美術館 二〇一二年、参照。
 - (8) 国立国会図書館所蔵の明暦版本では「祇王」の二図目（又廿一）は本文と離れてかなり後の方に組み入れられているが、図様から判断した。
 - (9) 国立国会図書館所蔵の明暦版本で「殿下乗合」（又十八）は前方の別の文の箇所に組み入れられているが、ここでは図様によって判断した。
 - (10) 出口久徳「平家物語 解説」『チェスター・ビーター・ライブラリー絵巻絵本解題目録 解説編』一五一〜一五二頁 勉強出版 二〇〇二年・出口久徳「絵入り本『平家物語』の挿絵をめぐる―チェスタービーター蔵本を中心に―」『立教大学大学院日本文学論叢』一四六〜一五六頁 二〇〇一年、など。
 - (11) WEB サイト「絵本・絵巻の世界」『徒然草』http://ehon-emaki.meisei-u.ac.jp/tsur-ezure_top.html 参照。
 - (12) 共同研究報告「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用」第二章 山本陽子「明星大学本『徒然草』の挿絵について」『明星大学研究紀要』〔人文学部・日本文化学科〕第十九号 一六九〜一七四頁 二〇一一年、参照。
 - (13) 滝澤貞夫「松代本『平家物語』考」『松代』一六〜二二頁 一九九七年、参照。
 - (14) 静嘉堂美術館編『室町の絵画展』図録九一〜九九頁 一九九六年、参照。
 - (15) 出口久徳「物語としての屏風絵―の谷合戦図屏風をめぐる―」『軍記と語り物』第三六号 六三〜七二頁 二〇〇〇年
 - (16) 出口久徳「寛文・延宝期の『平家物語』―延宝五年版『平家物語』と近世メディア―」『立教大学日本文学』第一一一号 八七〜九三頁 二〇一四年
 - (17) 京都大学附属図書館所蔵 奈良絵本コレクション「妓王」〔一般貴重書・86849・

明曆版本・明星本挿絵比較一覽図版

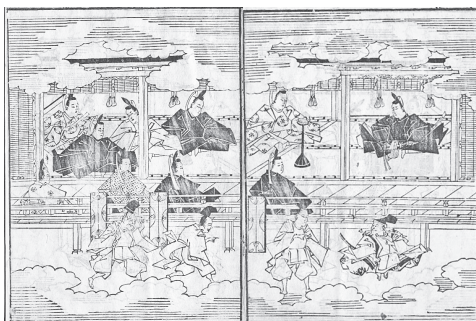


図 a 明曆版本巻一「殿上闇討」

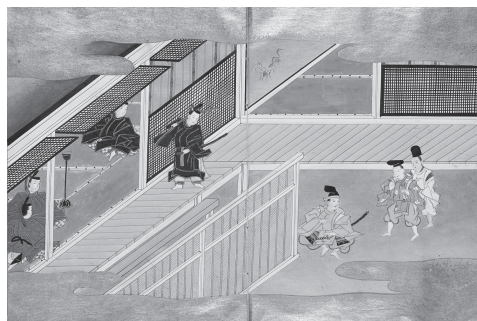


図 A 明星本巻一「殿上闇討」(1)

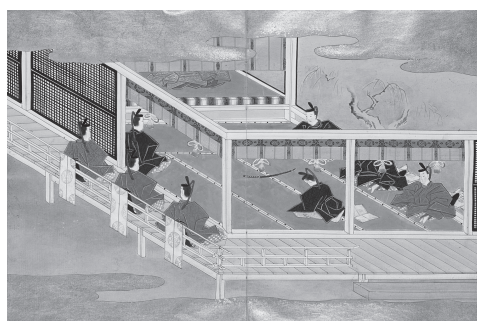


図 B 明星本巻一「殿上闇討」(2)

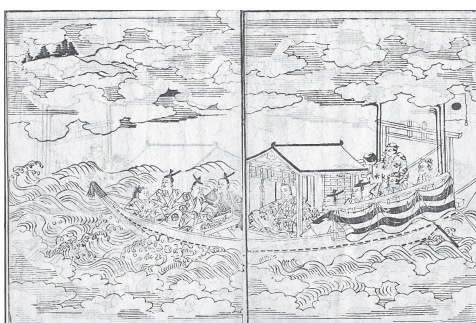


図 c 明曆版本巻一「鱸」

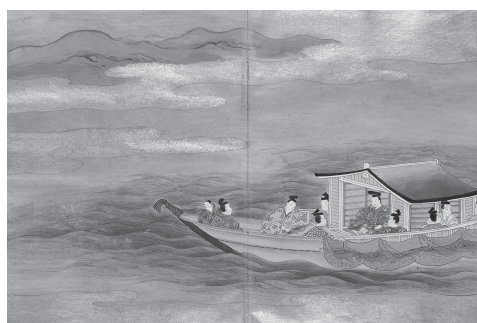


図 C 明星本巻一「鱸」

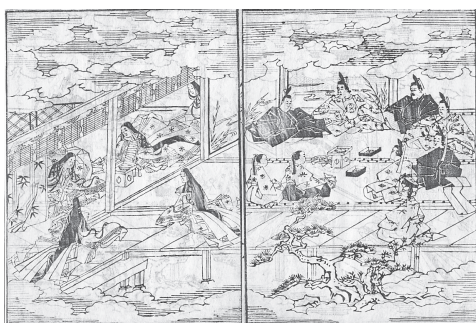


図 d 明曆版本巻一「我身栄華」

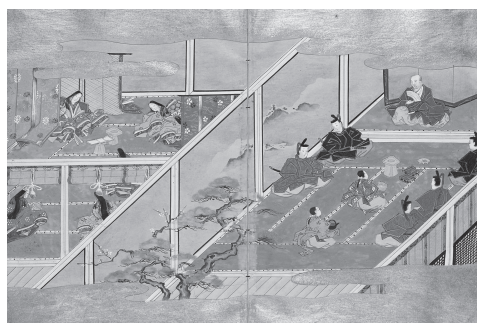


図 D 明星本巻一「我身栄華」

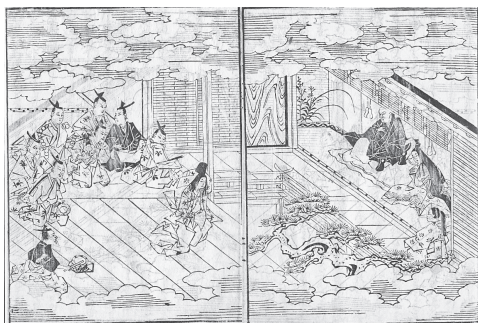


図 e 明暦版本巻一「祇王」(1)

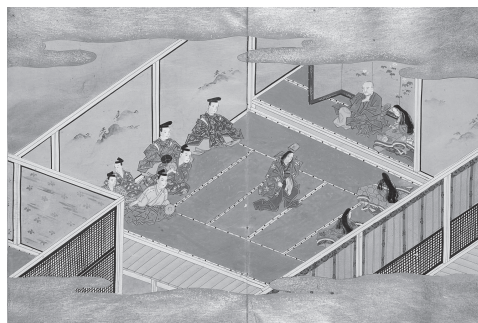


図 E 明星本巻一「祇王」(1)

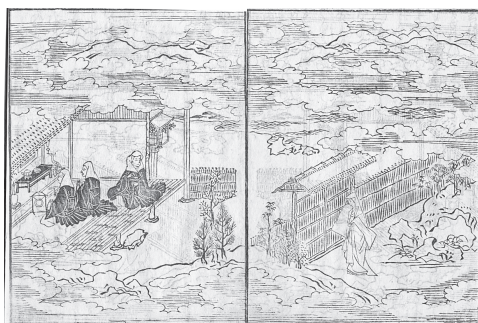


図 f 明暦版本巻一「祇王」(2)

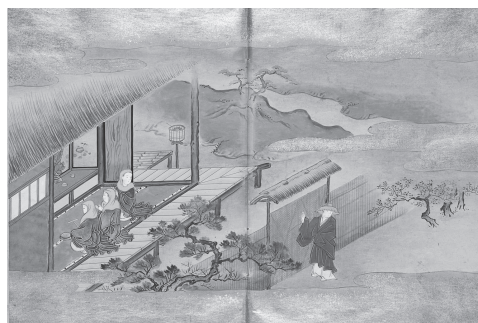


図 F 明星本巻一「祇王」(2)

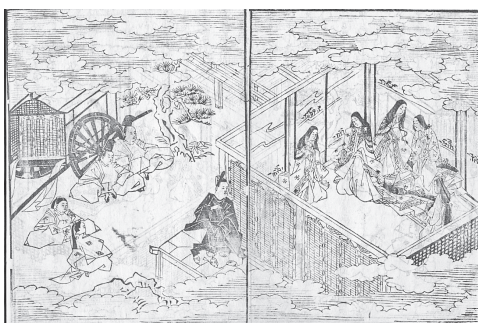


図 g 明暦版本巻一「二代后」

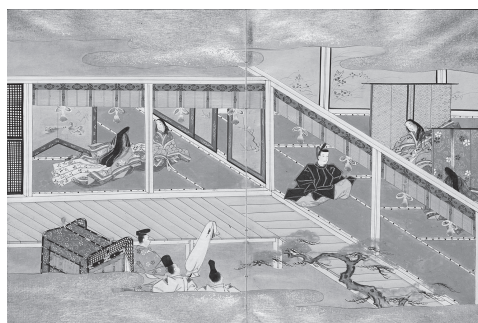


図 G 明星本巻一「二代后」

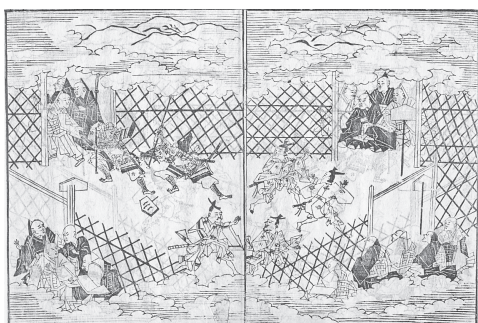


図 h 明暦版本巻一「額打論」

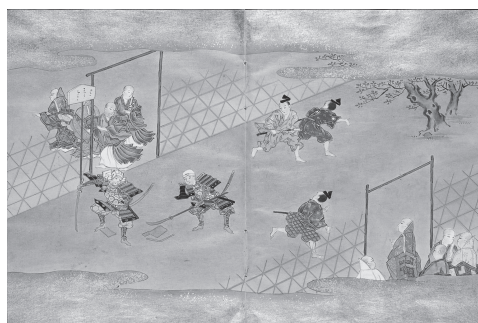


図 H 明星本巻一「額打論」

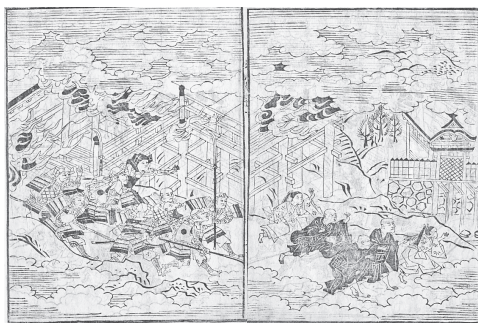


図 i 明暦版本巻一「清水炎上」

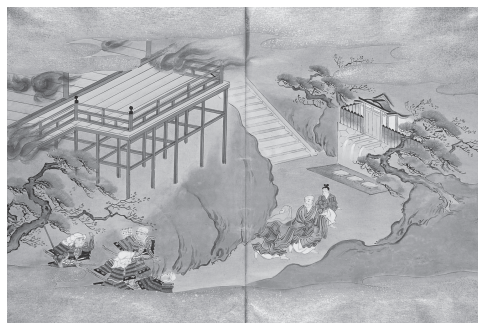


図 I 明星本巻一「清水炎上」

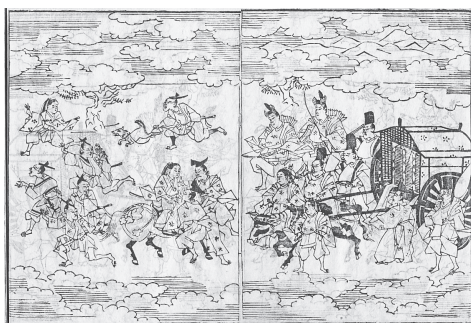


図 j 明暦版本巻一「殿下乗合」



図 J 明星本巻一「殿下乗合」



図 K 明星本巻一「鹿谷」(1)



図 I 明暦版本巻一「鹿谷」

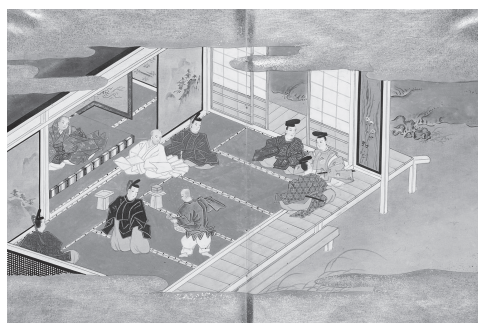


図 L 明星本巻一「鹿谷」(2)

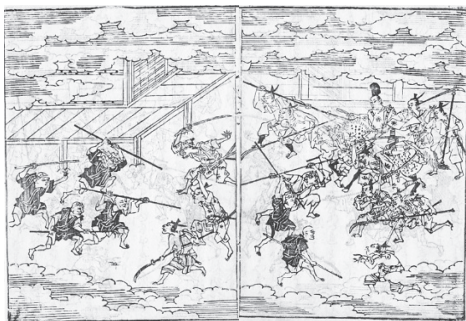


図 m 明暦版本巻一「鵜川合戦」



図 M 明星本巻一「鵜川合戦」

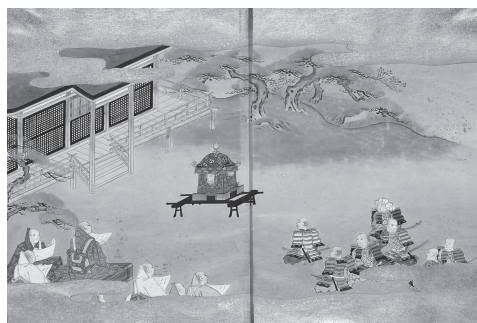


図 N 明星本巻一「願立」

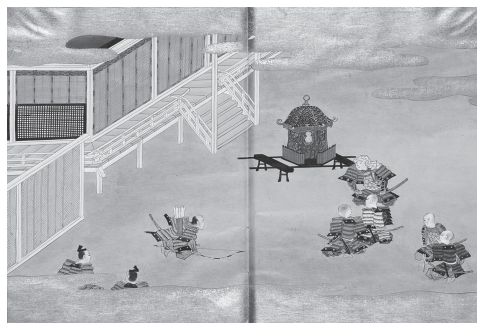


図 O 明星本巻一「御輿振」(1)

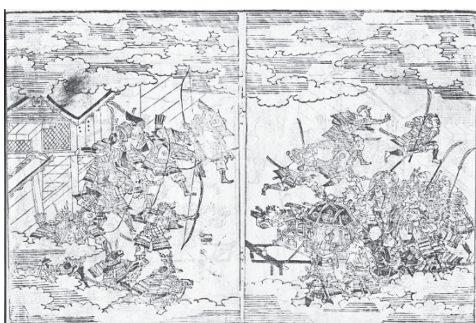


図 p 明暦版本巻一「御輿振」

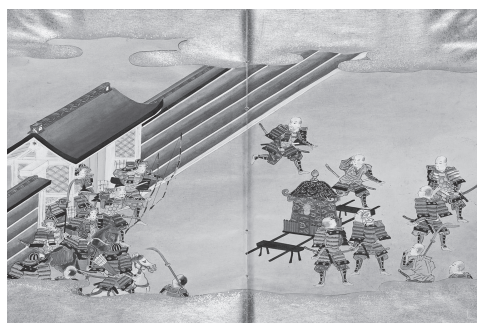


図 P 明星本巻一「御輿振」(2)



図 q 明暦版本卷一「内裏炎上」



図 Q 明星本卷一「内裏炎上」

『平家物語』 絵本・絵巻 (林原本・明暦版本・真田本・明星本・根津本) の場面对照表

内容末尾の洋数字は一段中にある異時同図の場面数 * は片頁のみ ○用い数字は鎖簡の本米の章の林原本での段数

巻一 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大宇蔵 絵本 (巻一)	根津美術館蔵 扇面 (上)
祇園精舎					
殿上聞討	前会に参内した忠盛と庭の家員 4	前会に参内した忠盛と庭の家員	前会に参内した忠盛と庭の家員	前会に参内した忠盛と庭の家員	鳥羽上皇に釈明する忠盛
鱧	鳥羽上皇に釈明する忠盛 2		鳥羽上皇に釈明する忠盛*	鳥羽上皇に釈明する忠盛	
	仙酒御所で歌を詠む忠盛				扇を見つけられて歌を詠む女房
	扇を見つけられて歌を詠む女房				熊野詣の船で鱧の吉兆を得る清盛
	熊野詣の船で鱧の吉兆を得る清盛	熊野詣の船で鱧の吉兆を得る	熊野詣の船で鱧の吉兆を得る	熊野詣の船で鱧の吉兆を得る清盛	
禿童	出家する清盛				
			清盛の前の禿童たち*		
	市中を見回る六波羅の禿童				
	清盛邸のにぎわい(長大画面)	清盛邸のにぎわい	清盛邸のにぎわい	清盛邸のにぎわい	清盛邸のにぎわい
我身榮華	妓王邸で銭を受け取る刀目				
妓王	仏御前を追い返す清盛 2				清盛邸を出る妓王(歌を残す)
	清盛に懇願する妓王 2				
	仏御前の舞を見る清盛と妓王 2		仏御前の舞を見る清盛と妓王	仏御前の舞を見る清盛と妓王	
	妓王に閑を出す清盛 2				
	清盛邸を出る妓王 2				
	悲嘆に沈む妓王一家		悲嘆に沈む妓王一家*		
	人々から文を受ける妓王 2				
	清盛から呼出を受ける妓王 3				
	仏御前の前で舞う妓王 2	仏御前の前で舞う妓王	仏御前の前で舞う妓王*		
	泣き沈む妓王一家				
	嵯峨の庵の尼姿の妓王一家				
	妓王の庵を訪れる尼姿の仏御前		妓王の庵を訪れる尼姿の仏御前*	妓王の庵を訪れる尼姿の仏御前	
	ともに念仏する妓王一家と仏御前	若者一行と牛車(殿下乗合②か)			
二代后	二条天皇の艶書を受取る大宮				
	入内の宣旨を下す二条天皇 2				
	大宮を説得する父の右大臣 2				
	泣く泣く車に乗る大宮	泣く泣く車に乗る大宮		大宮を説得する右大臣と迎える牛車	
	麗景殿の二条天皇と大宮		二条天皇に入内した大宮*		麗景殿の二条天皇と大宮(茶事)
御打論	二条天皇の発病と前御の宮中 2	三人の尼と一人の尼(妓王①か)			
	廟所で延暦寺の額を壊す興福寺僧	廟所で延暦寺の額を壊す興福寺僧	廟所で延暦寺の額を壊す興福寺僧	廟所で延暦寺の額を壊す興福寺僧	廟所で延暦寺の額を壊す興福寺僧
清水炎上	比叡山を駆け下る延暦寺の僧兵達				
	噂を聞いて内裏に集まる平家勢				
	清盛邸へ避難する後白河法皇 3				
	延暦寺側に焼討ちされる清水寺 2	延暦寺側に焼討ちされる清水寺	延暦寺側に焼討ちされる清水寺*	延暦寺側に焼討ちされる清水寺	
	後白河上皇の選御 2				
	上皇に本音を漏らす西光				

	新帝高倉天皇の御所		高倉天皇の即位式		
	鷹狩に興じる資盛				
殿下乗合	資盛主従を懲らしめる基房の下部		資盛主従を懲らしめる基房の下部		資盛主従を懲らしめる基房の下部
	資盛の訴えに怒る清盛 2				
	基房一行を辱める資盛の下部たち		基房一行を辱める資盛の下部たち		
	屈辱を喫く基房				
	資盛を叱責する重盛				
鹿谷	高倉天皇の朝顔行幸 2				
	山崎の宴事を報告する桜枝 3				
	成親が上賀茂社の夢告を受ける 2		成親が上賀茂社の夢告を受ける *		上賀茂社の神木への落雷
	上賀茂社の神木への落雷				
	鹿谷の宴会で瓶子を倒す成親 2		鹿谷の宴会で瓶子を倒す成親 *		鹿谷の宴会で瓶子の首をもぐ西光
柳川合戦	多田行綱を呼び寄せた成親				
	加賀国目代と湧泉寺僧侶との乱闘		加賀国目代と湧泉寺僧侶との乱闘		
	湧泉寺を焼く官人たち				
	目代の館を攻める白山の神人衆徒				
	白山の神人達が比叡山に訴える		白山の神人達が比叡山に訴える *		処分を折念する比叡山の僧侶達
願立					
	朝廷に訴える比叡山の大家たち				
	比叡山勢に矢を射かける頼春勢				
	比叡山の僧たちを追い返す武士達				
	関白を呪う比叡山の僧侶達				
	関白邸突き立つ櫓の枝				
		関白の病氣平癒祈願の牛車 *	関白の病氣平癒祈願に行く母 *		関白の病氣平癒祈願に行く母
	関白家に託重を示す少女				
	病の平癒した関白師通				
			再び病に付す関白師通 *		
	関白の死を嘆く女房達		死んだ関白と嘆く女房達 *		
御輿振	比叡山の神輿と頼政軍		比叡山の神輿と頼政軍		比叡山の神輿と頼政軍と重盛軍
	比叡山勢に矢を射かける重盛勢		比叡山勢に矢を射かける重盛勢 *		比叡山勢に矢を射かける重盛勢
内裏炎上	院御所の公卿詮議				
	祇園社に仮置される比叡山の神輿				
	比叡山勢入京の噂に移動する天皇				
	比叡山への使者を務める平時忠 2		比叡山への使者を務める平時忠 *		
	大内裏の炎上		大内裏の炎上		

巻二 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本	根津美術館蔵 刷面 (上)
座主流		公卿達と座主明雲 *	公卿達と座主明雲 *		
	明雲の罪を議す公卿達 2			明雲の罪を議す公卿達	
	明雲と追い立ての武士達				

	西光父子を呪詛する大衆				
	流される途中の明雲 2	流される途中の明雲 *	流される途中の明雲 *	流される途中の明雲	
	比叡山の衆徒が詮議 2	比叡山の衆徒が詮議 *	比叡山の衆徒が詮議 *	比叡山の衆徒が詮議	
	明雲奪還に向う大衆				
	比叡山に戻った明雲 3	比叡山に戻る奥の明雲 *	比叡山に戻る奥の明雲 *	明雲に奥を勧める祐慶	
	一行阿闍梨	九曜の形を見る一行阿闍梨	九曜の形を見る一行阿闍梨 *		
	西光被斬	法皇に奏上する西光			
	清盛に密告する行綱 2		清盛に密告する行綱 *		
	資成の復命を聞く清盛				
	清盛邸で捕まる成親 2	清盛邸で捕まる成親	清盛邸で捕まる成親	清盛邸で捕まる成親	清盛邸で捕まる成親
	西光が清盛に言い返す 4		西光が清盛に言い返す *	西光が清盛に言い返す	
	引き据えられる成親 2		引き据えられる成親		
	成親の命乞をする重盛 4	成親の命乞をする重盛	成親の命乞をする重盛 *	成親の命乞をする重盛	
	嘆く成親の家族 2				
	法皇に別れを告げる成経 3		法皇の側近に別れを告げる成経 *		
	少将乞請				
	教盛と対面する成経 2				
	教盛から清盛への使者となる季貞 2	清盛と家臣(清盛に伝える季貞か)	教盛から清盛への使者となる季貞	季貞に使者を命じる教盛 2	
	教盛の屋敷に戻る成経 2		教盛の屋敷に戻る成経 *		
	教訓	法皇に抗し武装する清盛	法皇に抗し武装する清盛 *		
	重盛に諫められる清盛 4	清盛と武装した兵士たちと公卿	重盛に諫められる清盛	重盛に諫められる清盛	重盛に諫められる清盛
	烽火	武士を自邸に集めさせる重盛 4	重盛邸に集まった武士達 *		
	重盛邸に集まった武士達	重盛邸に集まった武士達 *	重盛邸に集まった武士達 *	重盛邸に集まった武士達	
	新大納言被流	流罪となる成親の車と船 3	流罪となる成親の船 *	流罪となる成親の車	
	備前見島に着いた成親 2	備前見島に着いた成親 *	備前見島に着いた成親 *		
	阿古屋之松	幼い息子に語りかける成経 2	幼い息子に語りかける成経	幼い息子に語りかける成経	
	成親の配所を尋ねる成経		成親の配所を尋ねる成経 *		成親の配所を尋ねる成経か
	新大納言死去	成親の北の方が文を書く		成親の北の方が文を書く	
		北の方が文を信俊に託す			
	手紙を読む成親 2				
	返事を見て泣く北の方		返事を読む北の方 *	成親から返事を預かる信俊	
	崖から突落とされた成親				
	出家する成親の北の方				
	実定に重兼が提案する		実定に重兼が提案する *		
	徳大寺殿島詣	実定に重兼が提案する		実定に重兼が提案する	
	殿島神社社殿と実定の船			殿島神社社殿と実定の船	
	清盛に会う殿島内侍達 3				
	清盛に会う殿島内侍達 3				
	清盛と公卿たち(徳大寺左大將か)				
	山門滅亡	四天王寺に詣でる法皇			
	比叡山の大家と堂衆の戦	比叡山の大家と堂衆の戦	比叡山の大家と堂衆の戦	比叡山の大家と堂衆の戦	
	荒れ果てた比叡山				
	普光寺炎上	炎上する普光寺	炎上する普光寺 *	炎上する普光寺	

康頼祝詞	鬼界島の成経と康頼 3	鬼界島の成経と康頼	鬼界島の成経、康頼と俊寛 *	鬼界島の成経康頼	
本塔婆流	本塔婆を流す康頼成経 2			本塔婆を流す康頼成経	
	殿島で本塔婆を拾う僧 2			本塔婆と留守家族	殿島で本塔婆を拾う僧
	本塔婆と留守家族 3	泣く留守家族か	本塔婆と留守家族 *		
蘇武	雁に手紙を託す蘇武	雁に手紙を託す蘇武			
	手紙を読む昭帝 2				
	蘇武と帰還する漢軍 3				
	昭帝の前の蘇武 3		昭帝の前の蘇武 *		

巻三 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本	根津美術館蔵 扇面 (上)
敬文	高倉天皇の朝顔行幸				
	雪星の出現				
	中宮の安産祈願 3	中宮の安産祈願 *	中宮の安産祈願	中宮の安産祈願	
	赦免を勧める重盛 3			赦免状を書かせる清盛	
	赦免状を下す清盛 2	赦免状を書かせる清盛 *	赦免状を下す清盛 *		
足摺	赦免状を読む俊寛	赦免の船と成経康頼俊寛 *		赦免状を読む俊寛	
	成経の袂に廻り付く俊寛				
	渚で足摺りして泣く俊寛 3	渚で足摺りして泣く俊寛 *	渚で足摺りして泣く俊寛 *	渚で足摺りして泣く俊寛	渚で足摺りして泣く俊寛
御産巻	鹿瀬王の成経と康頼				
	産所の頼盛邸に来る人 2				
	施物を献上する重盛				
	安産祈願の僧たちと清盛	出産の心配をする清盛 *		安産祈願の僧たちと清盛	
	安産祈願の後白河法皇				
	中宮の出産 3	中宮の出産 *	中宮の出産	中宮の出産	中宮の出産
公卿揃	法皇へ献上品を渡す平家	門前に集まる馬 *	清盛に出生祝を言う公卿 *		
		清盛と公卿たち *			
大塔建立	僧侶らに勧賞を行う天皇	社殿前の老僧と一行		高野山で告げる高僧	
	高野山で告げる高僧 3				
	曼荼羅を描く清盛				
	殿島で小長刀を賜る清盛		殿島で小長刀を賜る清盛	殿島で小長刀を賜る清盛	
頼豪		天皇の前の僧侶 *			
	呪詛する頼豪	呪詛する頼豪 *	呪詛する頼豪 *	呪詛する頼豪	
	皇子の病床に現れた僧 2				
	皇子誕生を祈る良真 2				
少将郁選	成親の筆跡を読む成経 3			成親の筆跡を読む成経等	
	成親供養の成経と康頼		成親供養の成経と康頼 *		
	父の別荘で泣く成経等 2				
	家族と対面する成経 4	家族と対面する成経 *	家族と対面する成経 *	家族と対面する成経	同じ牛車で還る成経と康頼★

有王島下	俊寛へ文を預かる有王 2	双林寺に落ち着いた康頼 *			
	俊寛と有王の再会 5	俊寛と有王の再会 *	俊寛と有王の再会 *	俊寛と有王の再会	俊寛と有王の再会
		倒れ伏した俊寛 *			
	娘の手紙を読む俊寛 2				
	俊寛を葬る有王 2				
	俊寛の死を報告する有王 2		俊寛の死を報告する有王 *		
辻風	治承四年五月辻風の災 2		治承四年五月辻風の災 *	治承四年五月辻風の災	
医師問答	熊野本宮に参る重盛 2		熊野本宮に参る重盛 *	重盛に名医を勧める使者	重盛に名医を勧める使者
	重盛に名医を勧める使者		重盛に名医を勧める使者 *		
	使者の報告を聞く清盛				
	出家する重盛と泣く人々 2				
無紋沙汰	夢の話を書く重盛 2				
	無紋の刀を与える重盛 2	無紋の刀を与える重盛 *	無紋の刀を与える重盛 *	無紋の刀を与える重盛	
灯籠	重盛の行う念仏供養	重盛の行う念仏供養 *	重盛の行う念仏供養 *	重盛の行う念仏供養	
金渡	重盛は妙典に寄進を託す				
	育王山へ寄進する妙典 2				
法印問答	地震を占う安部季親 2	地震を占う安部季親 *	地震を占う安部季親 *		
	清盛と問答をする静憲 2	清盛と問答をする静憲 *	清盛の前に座る公卿たち *	清盛と問答をする静憲	清盛と問答をする静憲
大臣流罪					
	出家する関白基房	配流される大臣の奥 *		配流される大臣の奥	
		騎馬の団 *			
	配所で琵琶を弾く師長 3	話す公卿と僧(金渡②の重盛か) *			
		病に臥す公卿(金渡②の重盛か) *			
行隆之沙汰	自邸で切腹する遠業 2		自邸で切腹する遠業		
	清盛に呼ばれ嘆く行隆 3	門前の迎える事 *		清盛に呼ばれ悲しむ行隆	
	行隆に清盛の贈物が届く	男を囲む女房達 *	行隆に清盛の贈物が届く *		
法皇御遷幸	御所を囲む平家の軍勢 3				
	鳥羽殿に遷される法皇 3				
	鳥羽殿を訪れる静憲 3		鳥羽殿を訪れる静憲 *	鳥羽殿を訪れる静憲	
	悲しみに沈む中宮				
城南之離宮		天皇に奏上する宗盛か *			
	天皇の文を見る法皇 2	法皇の文を見る天皇 *			
	天皇に奏上する宗盛				
	離宮で冬を過ごす法皇		離宮で冬を過ごす法皇 *		
巻四 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本	根津美術館蔵 刷面 (上)
殿島御幸	離宮に幽閉される後白河法皇 4				
	静まり返る高倉上皇邸 2				

	鎌島行幸に出立する高倉上皇	鎌島行幸に出立する高倉上皇*			
	法皇に会うと宗盛に告げる上皇 3				
	高倉上皇と語らう後白河法皇 5	高倉上皇と語らう後白河法皇*	高倉上皇と語らう後白河法皇*	成範が法皇に上皇の到着を伝える	
還御	鎌島社に到着した高倉上皇 4		鎌島社に到着した高倉上皇		
	堀遠藤花を取らせる高倉上皇 2	高倉上皇の船*		堀遠藤花を取らせる高倉上皇	
	平家に勧賞する高倉上皇 3				
	鳥羽の津に還御した高倉上皇				
	安德天皇の即位式	安德天皇の即位の御奥*			
源氏揃	新帝即位の記録を見る二位殿				
	以仁王に源賴政が挙兵を勧める	以仁王に源賴政が挙兵を勧める*	以仁王に源賴政が挙兵を勧める*	以仁王に源賴政が挙兵を勧める	
	奥国へ下知する以仁王 3				
	熊野別当湛増が反乱鎮圧に失敗	熊野別当湛増が反乱鎮圧に失敗*	熊野別当湛増が反乱鎮圧に失敗	熊野別当湛増が反乱鎮圧に失敗	
關之沙汰	後白河法皇の館で騒ぐ關	後白河法皇の館で騒ぐ關*	後白河法皇の館で騒ぐ關*	後白河法皇の館で騒ぐ關	
		關の事を言う阿部泰親*			
	占いの返事を読む法皇 3				
	法皇の還御を宗盛が清盛に囁願 2				
	謀反の知らせを受ける清盛 3				
信連合戦	女装して川を渡る以仁王 3		女装して川を渡る以仁王	女装して川を渡る以仁王	
	宮に宿を渡す信連 2				
	宮の館に残った信連	宮の館に押しかける平家勢*			
	ただ一人立ち向かい奮戦する信連	ただ一人立ち向かい奮戦する信連*	ただ一人立ち向かい奮戦する信連*	ただ一人立ち向かい奮戦する信連	
	生け捕りにされる信連 2				
	宗盛の前に引き出された信連	宗盛の前に引き出された信連*	宗盛の前に引き出された信連*	宗盛の前に引き出された信連	
高倉宮園城寺入御	法輪院に落ち着く以仁王 2				
鏡	自邸を焼き三井寺に向う賴政 2				
	宗盛の名馬をせしめた鏡 4	宗盛と呼ばれた鏡*			宗盛が仲綱の馬に焼印を押すところ★
	鏡に謀られたことを知る宗盛 2				宗盛の馬をせしめた鏡が逃れるところ
	賴政の下で馬に焼印するところ 3	賴政の下で馬に焼印するところ*	賴政の下で馬に焼印するところ*	賴政の下で馬に焼印するところ	
山門陳状	比叡山へ陳状を記す三井寺大衆 2	文を書く僧侶達*	文を書く僧侶	文を書く僧侶	
南都陳状	比叡山の衆徒は陳状に怒る 2				
南都返陳		僧侶達と男*			
大衆揃	夜討を巡り真海と慶秀の長詮議 3		興福寺の返状を読む三井寺僧達*	興福寺の返状を読む三井寺僧達*	
	松明を持って出陣する三井寺勢 4	松明を持って出陣する三井寺勢*	夜討を巡り真海と慶秀の長詮議	夜討を巡る長詮議	
	宇治桶から落下する平家軍	三井寺を出る以仁王*	三井寺を出る三井寺勢*	三井寺を出る三井寺勢*	
桶合戦	宇治桶から落下する平家軍		宇治桶から落下する平家軍		
	矢切り但馬の奮戦				
	矢切り但馬の奮戦	矢切り但馬が淨妙坊の奮戦*			
	長刀を振るう淨妙坊		一人桶の上で戦う淨妙坊	淨妙坊の肩を一米法師が超える	
	淨妙坊の肩を一米法師が超える 2				
	忠綱一党が馬筏となり川を渡る 2	忠綱一党が馬筏となり川を渡る*	忠綱一党が馬筏となり川を渡る	忠綱一党が馬筏となり川を渡る	

宮御取期	平等院に討ち入る軍勢 3			
	平等院で戦う源氏軍と平家軍 4		平等院で戦う源氏軍と平家軍	
	切腹する頼政 4			切腹する頼政
	景家の軍勢に討たれる以仁王	景家の軍勢に討たれる以仁王 *	景家の軍勢に討たれる以仁王 *	景家の軍勢に討たれる以仁王
	宮を迎えに米た興福寺勢 3			
若宮御出家	剪腹する平家勢 2	以仁王の首実録をさせられる女 *		
	若宮の不在を報告する清盛 2			
	別離を悲しむ女院たちと若宮 3	出家させられる若宮 *	別離を悲しむ女院たちと若宮	
	出家させられる若宮 2			
鶴	天皇のおひえに詮議する公卿たち			
	怪物に弓をつがえる頼政 2	怪物に弓をつがえる頼政 *	怪物に弓をつがえる頼政 *	怪物に弓をつがえる頼政
	御剣を賜り歌を詠む頼政	御剣を賜り歌を詠む頼政 *		御剣を賜り歌を詠む頼政か
	弓をつがえる頼政 2			
	攻める平家勢と応戦する三井寺勢			
三井寺炎上	戦う三井寺勢と炎上する三井寺	炎上する三井寺	戦う三井寺勢と炎上する三井寺 *	戦う三井寺勢と炎上する三井寺

巻五 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本	根津美術館蔵 扇面 (上)
秘遣	内裏を出発する頼成行幸の行列	頼成行幸の行列	内裏を出発する頼成行幸の行列	内裏を出発する頼成行幸の行列	
	頼盛邸の安徳天皇				
	船で頼成に引越す人々 2				
新都	新都造営の測量をする人々 2		清盛が別荘に内裏造営をさせる *	新都造営の測量をする人々	
月見	月見に船を出す公卿達	月見に船を出す公卿達 *			
	大宮御所を訪ねる実定		大宮御所を訪ねる実定 *	大宮御所を訪ねる実定	
	大宮と対面する実定	大宮と対面する実定 *			大宮と対面する実定
	歌を詠み交わす識人と小侍従 2				
物怪	清盛の寝所に現れた巨大な顔 2				
					天狗と当番の衆 ★
	清盛の見た大鵬・馬尾の風 3	馬の尾に風が巣を作る *	清盛が怪夢を語る *	清盛の前に現れた大鵬	清盛の前に現れた大鵬
			馬の尾に風が巣を作る *	清盛の前に現れた大鵬	馬の尾に風が巣を作る ★
		清盛と若侍 *			
大庭早馬	夢見の話を解釈する成頼				
	早馬で頼朝孝氏の知らせが届く 2	頼朝孝氏の知らせが届く *		頼朝孝氏の知らせが届く	頼朝孝氏の知らせが届く
		顔を合わせる侍達 *			
朝敵捕	頼朝孝氏の報に怒る清盛 2				
威陽宮	太子丹を放免する始皇帝 2		頼朝孝氏の報に怒る清盛 *	頼朝孝氏の報に怒る清盛	
	荊軻を大臣にする太子丹 3		太子丹を放免する始皇帝 *		
	荊軻に加担する樊於期 2				
	始皇帝を襲う荊軻 2	刀を持って駆け寄る兵達 *			
	花陽夫人の機転で逃げる始皇帝	花陽夫人の機転で逃げる始皇帝 *		花陽夫人の機転で逃げる始皇帝	

文書発行	竹藪で苦行を試みる文覚 2	社殿(那智社か) *	那智庵で苦行する文覚 *	那智庵で苦行する文覚	那智庵で苦行する文覚
	那智庵で苦行する文覚 2	那智庵で苦行する文覚 *			
	苦行を強行する文覚 2				
	流行を成欲する文覚				
勅通帳	管弦中に勅通帳を讀上げる文覚	抵抗して暴れる文覚 *	管弦中に勅通帳を讀上げる文覚 *	管弦中に勅通帳を讀上げる文覚	
文覚極流	抵抗して暴れる文覚	管弦の奏 *	抵抗して暴れる文覚	抵抗して暴れる文覚	
	取り押さえられる文覚				
	引立てられる文覚 2				
	観音への手紙を代筆させる文覚				
		流罪の船の文覚 *		流罪の船の文覚	流罪の船の文覚
	竜神を叱る文覚 2	竜神を叱る文覚 *	竜神を叱る文覚 *		
伊豆院宣	頼朝に孝兵を勧める文覚	頼朝に孝兵を勧める文覚 *			
	福原に院宣をもらいに行く文覚 2		頼朝に院宣を渡す文覚 *	頼朝に院宣を渡す文覚	
	頼朝に院宣を渡す文覚 2	頼朝に院宣を渡す文覚 *			
富士川	東国へ行進する平家の軍勢			東国へ行進する平家の軍勢	
	女と別れの歌を詠み交わす忠度 3		女と別れの歌を詠み交わす忠度 *		
	富士川に軍を聚く平家勢				
	栢気づく平家軍 3	栢気づく平家軍 *	栢気づく平家軍 *		
	水鳥の羽音に逃げ出す平家軍 (4)	水鳥の羽音に逃げ出す平家軍 *	水鳥の羽音に逃げ出す平家軍 *	水鳥の羽音に逃げ出す平家軍	水鳥の羽音に逃げ出す平家軍
五節之沙汰	八幡大菩薩に感謝する頼朝	取戦の詮議をする平家の人々 *	取戦の詮議をする平家の人々	取戦の詮議をする平家の人々	
	取戦の詮議をする平家の人々 2	取戦の詮議をする平家の人々 *			
柳還	福原の新内裏に入る安徳天皇	福原の新内裏の安徳天皇か *		京都へ還る安徳天皇の一行	
	京都へ還る人々 3				
		近江進軍を命じる清盛か *			
	近江へ進軍する平家勢	近江へ進軍する平家勢 *			
奈良炎上	奈良から逃げ帰る忠成 2				
	首を晒される兼康の兵達				
	奈良へ進軍し戦う平家軍 2	興福寺衆徒と戦う平家軍 *	奈良へ進軍する平家軍 *	興福寺衆徒と戦う平家軍	
			戦う平家軍と炎上する民家		
	炎上する東大寺大仏殿	炎上する東大寺大仏殿か *		炎上する東大寺大仏殿	
	清盛に戦果を報告する重衡 2				

巻六 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本	根津美術館蔵 刷面 (上~中)
新院前御	静まり返る清涼殿と参内した成宝	御簾の降りた室内 *	経を読む僧侶達 *		
	高倉上皇崩御を悲しむ女房達 4	経を読む僧侶達 *	経を読む僧侶達 *		
紅葉		紅葉を焚いてしまう下部たち *	紅葉を染しむ高倉上皇 *	紅葉を焚いてしまう下部たち	紅葉を焚いてしまう下部たち
	葉を落とした紅葉を見る高倉天皇 2	下部に事情を聞く *			
	荷を奪われた少女を助ける天皇 3				

葵前	高倉天皇に進言する隆房	横たわる天皇に進言する隆房*			高倉天皇に進言する隆房か
	葵前に文を送る天皇 2	天皇の文を見る葵前*	天皇の文を見る葵前*	葵前に手紙を送る天皇	
小督	小督に文を送る隆房				
	仲国に小督を尋ねさせる天皇 2		仲国に小督を尋ねさせる天皇*	仲国に小督を尋ねさせる天皇	
	小督を探しあてる仲国 4	小督を探しあてる仲国*	小督を探しあてる仲国*	小督を探しあてる仲国	小督を探しあてる仲国
	小督の返事を預かる仲国 2	小督の返事を預かる仲国*			
	返事を読む高倉天皇				
	内裏へ向かう小督		内裏へ戻った小督*	内裏へ向かう小督	
	剃髪させられる小督 2				
	高倉上皇の崩御を嘆く後白河上皇				
廻文	清盛が讃島の姫君を法皇に送る		平家追討を企てる木曾義仲*	平家追討を企てる木曾義仲	
	平家追討を企てる木曾義仲 2				
飛脚到来	義仲蜂起の知らせが清盛に届く	協議する侍達*		義仲蜂起の知らせが清盛に届く	
	兵乱鎮圧の折衝が行われる 2				
	義基邸を攻める平家軍 2	出陣する兵士達*	義基邸を攻める平家軍		
		館を襲う兵士達*			
	西海の謀反の知らせを受ける清盛	門前で戦う兵達と室内の男女*	西寂を攻める河野通信*		
入道逝去	源氏追討を命じる後白河法皇 2				
	熱病に罹り水風呂に入る清盛 2	病付く清盛*	熱病に罹り水風呂に入る清盛*		
	遺言を語る清盛 2			遺言を語る清盛	
	囚死する清盛と弔問の人々 2	板の間で水を浴びる清盛*	清盛の死に弔問する人々		
結局	葬送の夜の变事と捕まった人々 3	捕まって事情を聞かれる人々*		捕まって事情を聞かれる人々	葬送の夜の变事
	経島の造営工事				
慈心房	閼魔王の宣旨を読む尊恵				
	閼魔王宮への迎えの事と尊恵				
	閼魔王宮の尊恵	閼魔王宮の尊恵*	閼魔王宮の尊恵		
		尊恵を迎える菩薩達*			
	清盛にこの夢を語る尊恵 2			清盛にこの夢を語る尊恵	
祇園女御	白河法皇の前に異形の老が出現				
	異形の油坊主を捕える忠盛	異形の油坊主を捕える忠盛*	異形の油坊主を捕える忠盛	異形の油坊主を捕える忠盛	異形の油坊主を捕える忠盛
	法皇と歌を詠み交わす忠盛	法皇と歌を詠み交わす忠盛か*			
洲股合戦	法住寺殿へ渡御を勧める宗盛 2				
	大仏殿の起工式を行う行隆				
	源氏と尾張川を挟んで戦う知盛 2	源氏と尾張川を挟んで戦う知盛	源氏と尾張川を挟んで戦う知盛	源氏と尾張川を挟んで戦う知盛	源氏と尾張川を挟んで戦う知盛
	矢作川の陣で平家を迎える源氏				
嘆声	黒雲に覆われ落馬し死ぬ助長 3	黒雲に覆われ落馬し死ぬ助長	黒雲に覆われ落馬し死ぬ助長	黒雲に覆われ落馬し死ぬ助長	
	助長頓死の知らせを聞く平家 2				
	配流より戻り案を披露する師長ら				

横田河原合戦	内裏で大仁王会が行われる 4			
	日吉社における法華経転読供養			
	内裏を固める平家軍 3			内裏を固める平家軍
	還御する法皇と迎える重衡軍 4			
	偽りの赤旗を掲げる義仲軍		横田河原で対峙する両軍	
		謀られて敗走する平家軍		
	宗盛の昇進に華や大波瀾			
	法住寺殿に行幸する安徳天皇			

巻七 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本	根津美術館蔵 扇面 (中)
北国下向		顔姿の武者と対面する若武者 *	義仲と人質になる息子との別れ	義仲と人質になる息子との別れ	義仲と人質になる息子との別れ
	人質の義仲の息子と対面する頼朝		義仲と人質になる息子との別れ	義仲と人質になる息子との別れ	義仲と人質になる息子との別れ
	義仲追討に北国へ下る平家軍 2	門前で旗を掲げる軍勢 *	民家から略奪する平家軍 *	義仲追討のため北国へ下る平家軍	
	竹生島へ船を出させる経正				
	弁財天社の前で琵琶を弾く経正 2	弁財天社の前で琵琶を弾く経正	弁財天社の前で琵琶を弾く経正 *	弁財天社の前で琵琶を弾く経正	弁財天社を詣でる経正
火打合戦		城内の義仲勢 *			
	火打城を攻めあぐねる平家軍 2	火打城を攻めあぐねる平家軍 *	火打城を攻めあぐねる平家軍	火打城を攻めあぐねる平家軍	火打城を攻めあぐねる平家軍
	鐘矢で攻め法を教える斎明 3				
	水を落として攻め込む平家軍 3				
	篠原で対峙する源平両軍 2				
本曾願書	覚明に願書を書かせる義仲 2	覚明に願書を書かせる義仲	覚明に願書を書かせる義仲 *	覚明に願書を書かせる義仲	覚明に願書を書かせる義仲
	八幡社に勝利を祈願する義仲				
俱利伽羅落	対峙したまま日暮れを待つ義仲軍			対峙したまま日暮れを待つ義仲軍	
	平家を俱利伽羅谷へ追い落とす 2	平家を俱利伽羅谷へ追い落とす		平家を俱利伽羅谷へ追い落とす	平家を俱利伽羅谷へ追い落とす
	首を切られる斎明 3				
	氷見の湊を馬で攻め込む義仲軍 3				
篠原合戦	仲間達と覚悟をしよう斎藤実盛 2			仲間達と覚悟をしよう斎藤実盛	
	畠山勢と今井勢の決戦				
	助けた行重に討たれる長綱 2	助けた行重に討たれる長綱	助けた行重に討たれる長綱 *	行重を助けてやった長綱	
	立ったまま討死する有国				
実盛最期	手塚主従に討たれる実盛・首実盛 2	手塚主従に討たれる実盛		手塚主従に討たれる実盛	手塚主従に討たれる実盛
			実盛の首実盛をする義仲 *	実盛の首実盛をする義仲	実盛の首を洗わせる義仲
玄昉	戦死者を弔う都の人々 2	戦死者を弔う都の人々 *			
	玄昉の首を持ち去る広綱の亡霊				
	興福寺に降った玄昉の團體	興福寺に降った玄昉の團體 *	興福寺に降った玄昉の團體 *		興福寺に降った玄昉の團體
本曾山門陳状	義仲は山門への陳状を書かせる	興福寺に降った玄昉の團體 *	義仲は山門への陳状を書かせる *	義仲は山門への陳状を書かせる	
		親武者達と三人 * (聖主臨幸①か)			
山門返牒	山門は義仲に加担の返牒をする	詔録する僧達と書状を囲む僧侶達	山門は義仲に加担の返牒をする *	山門は義仲に加担の返牒をする	
	山門の返牒を読む義仲				
平家山門連署	平家も山門に連署で願書を出す			平家から願書を受け取る明雲	

	日吉社に平家の願書を出す明雲				
主上都落	源氏に怯え荷造りする平家の人々		平家の願書を読む山門の僧侶達*		
	義仲を迎え討つため集まる平家				
	建礼門院に都落ちを建言する宗盛			建礼門院に都落ちを建言する宗盛	
	後白河法皇の行方を探す宗盛 2				
	出発する安徳天皇 2		出発する安徳天皇		
	都落ちの列から抜ける藤原基通			出発する天皇と列から抜ける基通	列から抜けた基通
維盛都落	家族に頼られ出発しかねる維盛 2	家族に頼られ出発しかねる維盛*			
	遅れた維盛に催促する平氏	遅れた維盛に催促する平氏 *		遅れた維盛に催促する平氏	遅れた維盛に催促する平氏
	維盛に追いつかる斎藤兄弟				
	平家に堀き払われる京の家々				
聖主臨幸	関東武者の命乞いをする知盛 2	書状の作成* (木曾山門陳状①か)	関東武者の命乞いをする知盛*		
		協議する仰* (山門返牒状①か)			
忠度都落	藤原俊成に和歌を差し出す忠度 2	藤原俊成に和歌を差し出す忠度 *	藤原俊成に和歌を差し出す忠度 *	藤原俊成に和歌を差し出す忠度	藤原俊成に和歌を差し出す忠度
経正都落	経正は法親王に琵琶を返す	経正は法親王に琵琶を返す *	経正は法親王に琵琶を返す *	経正は法親王に琵琶を返す	経正は法親王に琵琶を返す
	経正を見送る法親王 2				
青山之沙汰	宇佐八幡で名器青山を叩く経正				
	村上天皇に秘曲を授ける廉承武	村上天皇に秘曲を授ける廉承武*	村上天皇に秘曲を授ける廉承武*		村上天皇に秘曲を授ける廉承武
		居並ぶ公卿たち *			
一門都落	一行から途中で引き返す頼盛 2	都落ちする一門 *	都落ちする一門		
	常盤殿に命乞いする頼盛			一行から途中で引き返す頼盛	
	平家の一行に追いつく維盛兄弟	平家の一行に追いつく維盛兄弟か *			
	宗盛に進言する貞能	宗盛に進言する貞能か			
	重盛の墓前で嘆く貞能 2		重盛の墓前で嘆く貞能 *		
福原落	宗盛に忠誠を誓う平家の人々				
	福原の御所を見て回る人々				
	福原に火を放ち船を出す平家一門 2	福原に火を放ち船を出す平家一門	福原から船を出す平家一門	福原に火を放ち船を出す平家一門	

巻八 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本	根津美術館蔵 扇面 (中)
山門御幸	後白河法皇は比叡山に通れる 3				
	比叡山に詰めかけた貴族達				
		守護する源氏の一団 *			
		比叡山から還御する後白河法皇 *	比叡山から還御する後白河法皇 *	比叡山から還御する後白河法皇	
	戻って義仲らに院宣を下す法皇			院宣を受ける義仲と行家	
	法皇に懐く第四皇子 2		法皇に懐く第四皇子 *	法皇に懐く第四皇子	
	範光の叙位を沙汰する後鳥羽天皇				
名虎	安楽寺に参集し歌を詠む平家 2				
	皇位継承の競馬を見守る公卿達	皇位継承の競馬を見守る公卿達	皇位継承の競馬を見守る公卿達	皇位継承の競馬を見守る公卿達	
	皇位継承の相残の能雄と名虎	皇位継承の相残の能雄と名虎	皇位継承の相残の能雄と名虎	皇位継承の相残の能雄と名虎	

	恵亮の折りによって勝利する能雄 2				
宇佐行幸	第四皇子の即位を聞く平家一門				
	筑紫の佐御所 2				
	宇佐八幡へ行幸した平家一門	宇佐八幡へ行幸した平家一門	宇佐八幡へ行幸した平家一門	宇佐八幡へ行幸した平家一門	宇佐八幡へ行幸した平家一門
	名月に都をしのぶ平家一門 2				
結環	平家追い出しを下さる頼義				
	頼義の祖先の女と相手の男 3				頼義の祖先の女と相手の男
	正体を見す大蛇と頼義の祖先の女	正体を見す大蛇と頼義の祖先の女			
大宰府落	女と大蛇の間に生まれた戦犬太				
	説得に米た資産を追い返す頼義				
	使者頼村に説き聞かせる時忠				
	頼義方を攻める平家勢				
	雨中、大宰府を落ち行く平家一門	大宰府を落ち行く平家一門	大宰府を落ち行く平家一門	雨中、大宰府を落ち行く平家一門	大宰府を落ち行く平家一門(錯簡)
	平家を迎え入れる兵衛次秀遠				
	流離う平家の船から入水する清経			流離う平家の船から入水する清経	流離う平家の船から入水する清経
	屋島沖で暮らす平家一門 2				
征夷将軍院軍	院軍を受け取る三浦義澄	院軍を受け取る三浦義澄	院軍を受け取る三浦義澄	院軍を受け取る三浦義澄	
	引き出物を受け取る康定 2				
	康定に対面する頼朝	康定に対面する頼朝	康定に対面する頼朝	康定に対面する頼朝	
	引き出物を受け取る康定 2				
猫間	法皇に報告する康定				
	義仲に食事を出される猫間中納言	義仲と猫間中納言*		義仲に食事を出される猫間中納言	
	義仲の牛車と追う兼平	牛車と騎馬の一行*		義仲の牛車と追う兼平	
	牛車の後ろから降りる義仲				
水島合戦	船を出す平家追討軍と平家の使者				
	源平入り乱れての船戦	源平入り乱れての船戦	源平入り乱れての船戦	源平入り乱れての船戦	源平入り乱れての船戦
瀬尾最期	瀬尾兼康が謀で倉光三郎を殺す 2			瀬尾兼康が謀で倉光三郎を殺す	瀬尾兼康が謀で倉光三郎を殺す
	館で老兵を集める瀬尾兼康				
	瀬尾追討に進軍する今井兼平 2				
	城中の瀬尾勢を攻める今井兼平	城中の瀬尾勢を攻める今井兼平	城中の瀬尾勢を攻める今井兼平	城中の瀬尾勢を攻める今井兼平	
	退却する瀬尾勢を追う今井兼平 2	退却する瀬尾勢を追う今井兼平*			
	倉光次郎を水中で仕留める瀬尾 2			倉光次郎を水中で仕留める瀬尾	倉光次郎を水中で仕留める瀬尾
	息子小太郎を案する瀬尾兼康 3				
	奮戦する瀬尾兼親子と郎党 3	奮戦する瀬尾兼康*		奮戦する瀬尾兼親子と郎党	
室山合戦	進軍する義仲勢と通れる行家勢 2				
	行家勢を取り囲んで戦う平家軍	行家勢を取り囲んで戦う平家軍	行家勢を取り囲んで戦う平家軍	行家勢を取り囲んで戦う平家軍	
	船で河内長野に逃れる行家主従				
鼓判官	使者の鼓判官を侮る義仲 3			使者の鼓判官を侮る義仲	
	義仲追討を進言する知康 3				
	義仲に降参を進言する今井兼平	義仲に降参を進言する今井兼平*			

法住寺合戦	法住寺の知康と攻寄せる義仲軍 2	法住寺の知康と攻寄せる義仲軍	法住寺の知康と攻寄せる義仲軍	法住寺の知康と攻寄せる義仲軍
	法住寺炎上と攻めかける義仲軍 3			
	法皇方の敗走と興で通れる法皇 4		法住寺炎上と興で通れる法皇	
	裸の頼朝。船上の後鳥羽天皇 4		船上の後鳥羽天皇	
	奮戦する仲兼勢 4			
	落ちのびる仲兼主従 4	仲兼が討たれたと思いい泣く仲頼*		
	六条河原の首と勝鬨を挙げる義仲			
	法皇に明雲らの死を伝える僧龜 2			
	思い上がる義仲を諷める覚明	思い上がる義仲を諷める覚明*	思い上がる義仲を諷める覚明	
	熱田に留まる頼朝・義経軍 2			
	知康を非難する頼朝 2	知康を非難する頼朝か*		
	義仲の申出を協議する平家一門			
	師家を招致につける義仲 2			

巻九 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本	根津美術館蔵 扇面「中〜下」
小朝拜	星島で新年を迎える平家一門				
		正月を迎えた仮御所か	正月を迎えた仮御所か*		
宇治川	景季に降墨を与える頼朝				
	生食を下賜される高綱 2	生食を下賜される高綱	生食を下賜される高綱	生食を下賜される高綱	生食に気づく景季
	生食に気づく景季			生食に気づく景季	
	景季に言いつくろう高綱	景季に言いつくろう高綱*	景季に言いつくろう高綱*	景季と高綱の宇治川の先陣争い	景季と高綱の宇治川の先陣争い
	景季と高綱の宇治川の先陣争い	景季と高綱の宇治川の先陣争い*	景季と高綱の宇治川の先陣争い	徒歩の先陣となる重親	徒歩の先陣となる重親
	先陣の名乗りを上げる高綱、重親 2				
	敗走する本曾軍 2				
河原合戦	戦陣日記に目を通す頼朝				
	出立に女と別れを惜しむ義仲 2		出立に女と別れを惜しむ義仲*	出立に女と別れを惜しむ義仲	
	義仲軍と戦う東国勢 2				
		御所に参上する義経*			
	御所に合戦の様子を伝える義経 2	法皇と公卿たち*	御所に合戦の様子を伝える義経*	御所に合戦の様子を伝える義経	
	戦いつつ落ちてゆく義仲主従 2			戦いつつ落ちてゆく義仲主従	
本曾退却	今井兼平と再会する義仲 2				
	東国軍に追われる義仲勢	東国軍と奮戦する義仲勢*		東国軍と奮戦する義仲勢	
	別れ際に師重の首を捻じ切る巴 2	別れ際に師重の首を捻じ切る巴*	別れ際に師重の首を捻じ切る巴	別れ際に師重の首を捻じ切る巴	義仲との別れ際に師重と闘う巴
	義仲に自害を勧める兼平 2				
	泥田で討ち取られる義仲 2	壮絶な自害をする兼平*	泥田で討ち取られる義仲*	泥田で討ち取られる義仲	泥田で討ち取られる義仲
	壮絶な自害をする兼平			壮絶な自害をする兼平	壮絶な自害をする兼平
	義仲と兼平の死を聞く兼光 2				
樋口被斬	名乗り挙げて戦い討たれる光広 2		降伏した樋口兼光*	残党を集めて戦う兼光	
	降伏を勧められる樋口兼光 3				
	引き回される義仲の首と兼光	引き回される義仲の首と兼光*			
	一の谷に布陣した平家軍			一の谷に布陣した平家軍	

六箇度合戦	四国の兵船を追い払う教経勢				
	福良に攻め寄せた教経勢 2				
	二騎になるまで戦って逃げる通信 5		二騎になるまで戦って逃げる通信*		二騎になるまで戦って逃げる通信
	忠景勢に攻めかかる教経勢 2				忠景勢に攻めかかる教経勢
	安摩・園部の兵を討ち取る教経 2	安摩・園部の兵を討ち取る教経			
	通信ら源氏勢を追い散らす教経 2	通信ら源氏勢を追い散らす教経			
三草勢揃	院の御所に参上した範頼と義経				院の御所に参上した範頼と義経
	清盛の忌日に仏事を営む平家一門				
	福原で除目の沙汰をする宗盛				
	妻子を思い泣く維盛 2				
	西へ進軍する範頼軍 2	西へ進軍する義経軍*		西へ進軍する範頼軍と義経軍	
	小野原に布陣する義経軍 2				
三草合戦	民家を焼き夜討ちに込む義経軍 2	夜討で平家陣になだれ込む源氏軍		民家を焼き夜討ちに込む義経軍	
	平家陣になだれ込む源氏軍		夜討で平家陣になだれ込む源氏軍		夜討で平家陣になだれ込む源氏軍
	船で屋島へ渡る資盛たち 2				
老馬	出陣を応諾する教経 2				通盛を諫める教経
	敵襲に備える教経勢 2	平家軍の陣*	敵襲に備える教経勢*		
	老馬を案内に山道を行く義経軍 2			老馬を案内に山道を行く義経軍	老馬を案内に山道を行く義経軍
	頼朝に道案内を命じる義経	頼朝に道案内を命じる義経*	頼朝に道案内を命じる義経*		頼朝に道案内を命じる義経
一二之駆	平山季重の様子を聞く熊谷直実 2				
	平家の木戸で熊谷に追いつく季重			平家の木戸で名乗る熊谷父子	
	奮戦する熊谷父子と季重	奮戦する熊谷父子と季重	奮戦する熊谷父子と季重	平家の木戸で熊谷に追いつく季重	
	徒歩で戦う熊谷父子 3			奮戦する熊谷父子と季重	
	替馬で奮戦する熊谷父子		敵陣へ単騎攻め込む季重*	徒歩で戦う熊谷父子	
二度之駆	平家の木戸口を攻める源氏勢				
	敵陣へ突入する河原兄弟 2	討死する河原兄弟*	敵陣へ突入する河原兄弟*		討死する河原兄弟
	討死する河原兄弟				
	景高を先頭に攻込む梶原勢			景高を先頭に攻込む梶原勢	
	長男を押し再度突入する景時 2		長男を押し再度突入する景時*		
	崖を背に戦う梶原父子 2	崖を背に戦う梶原父子*		崖を背に戦う梶原父子	崖を背に戦う梶原父子
坂落	入り乱れて戦う両軍				
	鶴越を落ちた鹿を射る平家軍 2		鶴越を落ちた鹿を射る平家軍	鶴越を落ちた鹿を射る平家軍	鶴越を落ちた鹿を射る平家軍
	馬を落としてみる義経	平家の陣と鶴越を下る義経軍		馬を落としてみる義経	馬を落としてみる義経
	炎上する陣と船へ逃れる平家軍		炎上する陣と船へ逃れる平家軍		
	船で屋島へ向かう教経たち 2				
	知盛に一の谷の取帳を伝える 2				
盛後最期	則綱を助け休息する盛俊				
	則綱を助け休息する盛俊	則綱を助け休息する盛俊*		則綱を助け休息する盛俊	則綱を助け休息する盛俊
	盛俊の首を取る則綱	盛俊の首を取る則綱*		盛俊の首を取る則綱	
	腕を切られ討たれる忠度	腕を切られ討たれる忠度*		腕を切られ討たれる忠度	腕を切られ討たれる忠度
忠度最期	忠度の残した歌を読む六弥太	忠度の残した歌を読む六弥太*		腕を切られ討たれる忠度	腕を切られ討たれる忠度

重衡生捕	馬を射られた重衡 2	馬を射られた重衡 *		馬を射られた重衡	馬を射られた重衡
	自害を止められた重衡	自害を止められた重衡 *			
敦盛最期	若武者を呼び返す熊谷直実 2	若武者を呼び返す熊谷直実 *		若武者を呼び返す熊谷直実	若武者を呼び返す熊谷直実
	若武者の悲運に泣く直実 2	若武者の首を取る直実 *			
浜戦					義盛が土屋重行に討たれる ★
	討ち死にする平家の武者達 2				父を助けて討死する知章
	父を助けて討死する知章 2	父を助けて討死する知章 *		父を助けて討死する知章	父を助けて討死する知章
	船に逃げ延びた知盛と、井上黒	船に逃げ延びた知盛と、井上黒 *		船に逃げ延びた知盛と、井上黒	船に逃げ延びた知盛と、井上黒
				陸に上がって嘶く井上黒	
	知章の死を聞いて泣く宗盛たち				
落足	沈む船から引き上げられる師盛	沈む船から引き上げられる師盛 *		沈む船から引き上げられる師盛	沈む船から引き上げられる師盛
	源氏勢に討たれる通勢 2	源氏勢に討たれる通勢 *			
	海上をさすう平家一門の船			海上をさすう平家一門の船	
小宰相	通勢の死を聞き泣く小宰相	通勢の死を聞き泣く小宰相 *		通勢の死を聞き泣く小宰相	通勢の死を聞き泣く小宰相
	入水する小宰相			入水する小宰相 *	入水する小宰相
	小宰相の死体を引き上げる平家	小宰相の死体を引き上げる驚く平家 *			
	小宰相を水葬にする平家の人々				
	小宰相と通勢の恋文の話 2				

巻十 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本	根津美術館蔵 刷面 (下)
首渡	維盛の身を案じる北の方				
	都大路を渡される平家軍の首	引き回される牛車(内裏女房①か)	首を都大路を渡すよう求める源氏 *	首を都大路を渡すよう求める源氏	
	維盛の病気を伝える斎藤兄弟				
		維盛の手紙を読む妻子 *		維盛の手紙を読む妻子	
	返事を書く維盛の妻子 2				
	妻子の手紙に涙を流す維盛	妻子の手紙を受取る維盛 *			
内裏女房	都大路を引き回される重衡		都大路を引き回される重衡	都大路を引き回される重衡	
	重衡に院宣を伝える定長				
	屋島への使者に伝言する重衡				
	申出て重衡の話相手をする知時 2			申出て重衡の話相手をする知時	
	重衡の手紙を読む内裏女房 2		重衡の手紙を読む内裏女房 *		
	女房との対面の許しをどう知時				
		牛車と門外で待つ武士達 *			
	訪れた女房と語り合う重衡 2	訪れた女房と語り合う重衡 *		訪れた女房と語り合う重衡	重衡を訪れる内裏女房
	別れを惜しむ重衡と女房 2				
八島院宣	院宣に目を通す宗盛				院宣を聞く宗盛
請文	重衡の助命を訴える二位の尼	重衡の助命を訴える二位の尼 *	重衡の助命を訴える二位の尼 *	重衡の助命を訴える二位の尼	院宣を聞く二位の尼
	重衡への手紙を書く二位の尼 2	文に目を通す男 *			
	請文を読む後白河法皇				
成文	法然との対面を願う重衡				

	海に馬を乗り入れる盛綱		
	馬で押し渡って戦う源氏と平家軍		
	星島へ退却する平家軍 2		
大曾会之沙汰	御殿行幸の行列 2	文を読む公卿と尼君* (藤戸②か)	
	遊び呆ける範頼たち	屋内の公卿たち* (藤戸④か)	

巻十一 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本	根津美術館蔵 扇面 (下)
逆櫓	平家追討の院宣を受ける義経 2			平家追討の院宣を受ける義経	
	行末を喰く平家一門				
	梶原景時と争論する義経	梶原景時と争論する義経*	梶原景時と争論する義経*	梶原景時と争論する義経	
	強風に船出させる義経軍	強風に船出させる義経軍*		強風に船出させる義経軍	
	烽火で先導する義経の船				
勝浦合戦	上陸する義経軍				
	親家を引見する義経			親家を引見する義経	
	能達のを攻める義経勢 2	能達のを攻める義経勢	能達のを攻める義経勢		
	勝利を喜ぶ義経勢				
大坂越	星島へと急ぐ義経軍 2				
	平家への使者を捕える義経勢				
	星島を急襲する義経軍 4	星島を急襲する義経軍	星島を急襲する義経軍	平家への使者を捕える義経勢	平家への使者を捕える義経勢
	次々に名乗りを挙げる義経軍			次々に名乗りを挙げる義経軍	星島を急襲する義経軍
嗣信最期	舌戦の末に射られる盛綱 2	教経に射落される嗣信*	舌戦の末に射られる盛綱*	教経に射落される嗣信	
	嗣信の死に泣く義経		教経に射落される嗣信		
	嗣信の菩提を弔わせる義経	嗣信の菩提を弔わせる義経*			
那須与一	那須与一に扇を射るよう命じる義経		扇を射る那須与一	扇を射る那須与一	扇を射る那須与一
弓流	上陸して攻める景清たち平家勢				
	美尾屋十郎の腰をちぎった景清				
	弓を拾う義経をめぐり戦う同軍	弓を拾う義経をめぐり戦う同軍	美尾屋十郎の腰をちぎった景清*	美尾屋十郎の腰をちぎった景清	美尾屋十郎の腰をちぎった景清
	眠る源氏軍と敵を見張る義経		弓を拾う義経をめぐり戦う同軍	弓を拾う義経をめぐり戦う同軍	弓を拾う義経をめぐり戦う同軍
志度合戦	志度浦に漕ぎ寄せかける平家軍 2				
	教能に平家が負けたと謀る義盛 2	教能に平家が負けたと謀る義盛*	教能に平家が負けたと謀る義盛*	教能に平家が負けたと謀る義盛	教能に平家が負けたと謀る義盛
	教能に降伏を勧める義盛 2	降伏した教能を連れ帰る義盛*			
	遅れて星島に到着した梶原勢				
	法皇に瑞光を報告する神主				
増浦合戦	梶原軍に合流する義経軍				
	闘勇で進退を占う別当湛増	闘勇で進退を占う別当湛増*	闘勇で進退を占う別当湛増*		
	源氏軍に漕ぎ寄せる湛増軍				
	義経と景時の同士討ちを止める源氏	義経と景時の同士討ちを止める*		義経と景時の同士討ちを止める源氏	義経と景時の同士討ちを止める源氏
	巧みに戦う梶原景時勢				

遠矢	平家軍に下知する知盛	陸地で向い合い弓を射る軍(?)				重能を討つべきだという知盛
	重能に問いただず宗盛					
	いっせいに矢を射かける平家軍	船上で矢を射かける軍勢*				
	平家に矢を射返すよう招く義経	入り乱れて戦う両軍*				
	義盛の矢を射返す源清					
	仁井紀四郎を射返す浅利与一					仁井紀四郎を射返す浅利与一
	源氏軍に舞い降りる白旗					
	海豚の群の吉凶を占う平家軍 2					
先帝御入水	女房達に敗戦を告げる知盛					
	帝とともに入水する二位の尼	帝とともに入水する二位の尼*				帝とともに入水する二位の尼
能登殿最期	海から引上げられる建礼門院				引上げられる建礼門院と泳ぐ宗盛父子	
	内侍所の唐櫃を開けかける源氏軍	内侍所の唐櫃を開けかける源氏*				
	引き上げられる宗盛父子 2					
	乳母子の景経の最期を見る宗盛				引き上げられる宗盛父子	
	教経に追われて跳んで逃げる義経	教経に追われ跳んで逃げる義経*				教経に追われて跳んで逃げる義経
	実光兄弟を道連れに入水する教経	実光兄弟を道連れに入水の教経*			実光兄弟を道連れに入水する教経	実光兄弟を道連れに入水する教経
内侍所都入	平家軍と散らばる赤旗				平家軍と散らばる赤旗	
	平家の滅亡を奏上する広嗣	刺撃する三人(維盛出家②)*				
	京に護送される平家の男女 2	修行者と侍連(維盛出家①)*				
	神器を迎えに鳥羽に向かう人々	僧達と通行人(熊野参詣①)*				
		社殿を拜む修行者達(熊野参詣①)*			都に戻された神器*	
一門大路極渡	二宮奉迎の牛車を見送る女院					
	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち			都大路を引き回される宗盛たち	
	眠る清宗に清物を掛ける宗盛					
平大納言文之沙汰	文箱の処遇を時実と相談する時忠	文箱の処遇を時実と尋ねる時忠*				
	義経の時忠の娘に返す義経 2	文箱を時忠の娘に返す義経*			文箱を時忠の娘に返す義経	
副将被斬	義経の所業に激怒する頼朝					
	副将を抱いて泣く宗盛	副将を抱いて泣く宗盛*			副将を抱いて泣く宗盛	
	副将を見送る宗盛父子					
	副将に斬りかかる兵士達 2					
	副将の首を斬る兵士達 2	副将の首を斬る兵士達*			副将の首を斬る兵士達	
	鎌倉へ護送される宗盛父子と義経					
腰越	頼朝に鎌言する景時と集まる兵士	頼朝に鎌言する景時*				
	金泔沢の岡から追い返される義経					
	申し開きの状を書かせる義経	申し開きの状を書かせる義経*			申し開きの状を書き義経*	
	申し開きの状を書かせる義経	申し開きの状を書かせる義経*				
大臣殿御門	頼朝の口上を畏まって承る宗盛	頼朝の口上を畏まって承る宗盛*			頼朝の口上を畏まって承る宗盛	
	都に護送される宗盛父子	宗盛に引導を渡す僧*				
	首を討たれる宗盛	首を討たれる宗盛*			首を討たれる宗盛父子*	
	父の最期を尋ねる清宗					

	晒された宗盛父子の首				
巻十二 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本 (巻十二なし)	根津美術館蔵 刷面 (下)
重衡被斬	北の方と対面する重衡	奈良へ送られる重衡*	奈良へ送られる重衡*	北の方と対面する重衡*	
	髪を形見に北の方に渡す重衡				
	北の方と別れる重衡				
	奈良の大衆に引渡される重衡 2				
	斬首される重衡	斬首される重衡*	斬首される重衡*		
	泣き悲しむ尼僧達(長谷六代④み)				
大地震	大地震に逃げまどう人々	大地震に逃げまどう人々*	御所へ還御する法皇の一行		
紺袈沙汰	御所へ還御する法皇の一行 4	御所へ還御する法皇の一行*	御所へ還御する法皇の一行		
	義朝の關懷を捧げ鎌倉下向の文覚				
	義朝の關懷を受け取る頼朝 2	義朝の關懷を受け取る頼朝			
	義朝の墓に贈官を告げる勘使				
平大納言被流	建礼門院に別れを告げる時忠	妻子と名残を惜しむ時忠	妻子と名残を惜しむ時忠		
	妻子と名残を惜しむ時忠	妻子と名残を惜しむ時忠	妻子と名残を惜しむ時忠		
	配所へ護送される時忠				
土佐房被斬	義経討取を下知する頼朝				土佐房を連れて行く弁慶
		義経に起請文を書く土佐房*			
	義経の夜襲をかける土佐房 2	土佐房勢を討破る義経主従*			
	土佐房勢を討破る義経主従				
	義経の前に引出された土佐房 2		義経の前に引出された土佐房*		
判官都落	頼朝に義経追討を命じる頼朝				
	緒方三郎に則勢を頼む義経 2				
	九州に下向する義経勢 3	義経勢に攻めかかる太田勢*	九州に下向する義経勢		九州に下向する義経勢の船
	義経勢に攻めかかる太田勢 2	九州に下向する義経勢*			
	義経に置き去りにされた女房達 1				
	義経追討の院宣を願出る北条時政				
吉田大納言沙汰	頼朝の申請を検討する法皇たち				
六代	次々に捕えられる平家の子孫達 2				
	六代の隠れ家を見つけた時政勢 2	六代の隠れ家を見つけた時政勢*	六代の隠れ家を見つけた時政勢*		六代の隠れ家を見つけた時政勢
	僧坊の六代を取り囲む時政たち				
	六代を進行する時政の一行 2	六代を進行する時政の一行*	六代を進行する時政の一行		
	六代に返事を書く母君				
	文覚に六代の助命を頼む乳母	波打際の僧たち(六代被斬②)*	文覚に六代の助命を頼む乳母*		
	泣く親子達(長谷六代③の錯簡か)	護送の奥(六代被斬③み)*			
	時政に六代の命といえる文覚 2				
	六代の身を案じる母君たち	東海道を下る奥*	六代の身を案じる母君たち*		
	斬首の場に引き出される六代 2	斬首の場に引き出される六代*			

	斬首を止める使者の僧 2		斬首を止める使者の僧 *		
	頼朝の書状を読む時政				
長谷六代	仔細を読む文覚 2				
	大覚寺にたどり着いた六代				
	泣く女房達(六代⑦との錯簡か)		戻った六代と再会する母君たち *		長谷寺で六代と再会する母
	合掌する尼(重衡被斬⑥の錯簡か)				
六代被斬	島を見て泣く六代(六代被斬②か)				
	旅に出る六代 2(六代被斬①か)				
	捕らわれた文覚				
		山を下る六代の奥(長谷六代①) *	鎌倉へ送られる六代 *		
	首を斬られる六代	六代と再会する母(長谷六代③) *			
女院御出家	真山の僧坊で泣く建礼門院				
	泣く僧と公卿達(小原御幸④か)	出家する女院 *	出家する女院 *		出家する女院
	涙する尼婆の建礼門院	合掌する二人の尼 *			
	懷田の歌をしたためる女院				
	女院を慰めに訪れる女性たち				
小原入御	小原の里に移る女院 2		念仏を唱える女院たち *		
	物音に人の訪れを思ふ女院				
小原御幸	小原に御幸する法皇	小原に御幸する法皇 *			小原に御幸する法皇
	強光院の庭を眺める法皇 2				
	法皇と語り合う阿波の内侍		法皇と語り合う阿波の内侍 *		
	女院を待つ法皇(小原御幸⑤か)	女院を待つ法皇 *	女院を待つ法皇		
	女院と語る法皇(六道之沙汰①か)				
六道之沙汰		女院と語る法皇	女院と語る法皇 *		
女院御往生	法皇を送る女院 2	三人の尼 *			
	臨終を迎える女院	臨終の女院と阿弥陀の米迦 *	臨終の女院と阿弥陀の米迦 *		